~ idiosyncrasy ~

ダメ人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Idiosyncrasy

【Nコード】

N9241N

【作者名】

ダメ人間

【あらすじ】

構成再検討中 いつ消すか分からないので見ない方がいいかと。

ここは魔法が一般的に使われている世界

「Idiosyncrasy」……特異体質

そこには生まれつき魔力がない男の子がいた。

処女作ですので留意していただけるとありがたいです。

暇なときに読めるように1ページを短めにしています。故にページ数
が多くなりますが深くつつこまずに気軽に読んでください。

ただいま修正作業中。

プロローグ

「おぎゃ〜、おぎゃ〜」

新たな命の誕生を告げる泣き声が家中に響き渡る。

「生まれたのか！」

勢いよく古ぼけた茶色のドアを開けると、そこには愛しい妻と我が家の後継ぎに相応しい魔力を持った勇ましい男の子がいる……

……はずだった。

「なぜだ……」

先ほどまで笑顔だった男がワナワナと震えだして生まれたばかりの子を抱え上げた。

「どういうことだ！　これが我が紫雲（シウン）家の跡取りになる息子だと！？」

生まれたばかりの我が子のことを『これ』呼ばわりすることからして、この男は相当冷静さを失っているのだろう。

「あなた、落ち着いて」

優しいような表情で横になっている女が静かな声で言った。

「魔力はどうかであろうと立派な男の子ですよ」

女は言葉を続けたが、信じられない言葉を聞く事になる。

「ならん！ ならんのだ！ 名家とも言われる我が紫雲家の跡取り息子に魔力が無いだと？ こやつが家を継いだとしたら確実に他の勢力につぶされてしまっわい！」

顔を真っ赤にして男は続ける、

「……一五歳までなら家においてやる、その後は金を工面するから独立させる」

血走った男の眼には、忌々しき子供が映っていた。

1話 紫雲 総司

「……ん、朝か」

窓から差し込む光と小鳥の鳴き声が朝を知らせる。

「最悪の夢だ」

清々しい朝と対照的な重苦しい気分、昔の家にいたときに召使から聞いた俺の誕生の瞬間。

別に今さら家のことなど、どうでもいいと思っっているのだがいい気分にはならない。

追い出されるのも癪に障るので二年前に自分から飛び出してきたが、今日は高校入学の日だ。手紙などの贈り物があってもいいのではないかと思っただが来なかった。

しかし学費や生活費の入金は増えた。

入学する高校は、卒業後にギルドや軍隊に就職することを想定した魔法学校である。学費はそこそこ掛かるのだが、圧倒的に余る入金額である。

理由は簡単だった。「口止め料」と言ったところだろうか、名家として有名な紫雲家だからこそ「魔力が無いために長男を追い出した」などと噂を立てられるのは困るのだろう。

事を荒立てるつもりはないので、金なんかもらわなくても黙ってい

るのだが……

しかし少年こと紫雲^{シウン} 総司^{ソウジ}は魔力が無いのにも関わらず、なぜ魔法学校に入学したのかというと、簡単にいえば「自分の可能性を信じた」結果だった。

総司は自分の中に蠢くパワーのような何かを感じていた。それを魔力と信じ自分の可能性に賭けたのだ。

「よし、行くか」

いつの間にか仕度を終えた総司はブレザーのネクタイをキュツと締め、引き込まれそうな漆黒の髪と瞳を揺らして扉を閉めた。

2話 レイ・ヘイスト

「おーい！ 総司〜！」

来た…… 金髪に金の瞳を輝かせて初日くらい目立たずに生活したいと思っていたのにその思惑をあっさりと打ち崩す中学からの悪友が。

「レイ、目立つから大声で俺を呼ぶな」

「え〜、いいじゃんか！ 俺とお前の仲だろ」

「どんな仲だ」と心の中でつつこみながら毎日のように同じやり取りを繰り返している俺達、傍から見ればかなりバカっぽいことだろう。

7

しかし、一見バカっぽいレイ・ヘイストだが中学では頭脳明晰で戦闘の訓練でも上位の成績を維持するという意外性の高い男。

実力が無い自分にとってレイはいい手本であり、目標でもある。他の成績上位者達と違い、下の者を馬鹿にするなどの事は絶対にしないのだ。

いつもは口に出さないが、いい友達をもったと思っている。

くだらない雑談に花を咲かせながら学校に到着した。事前に学校か

らの通知でクラスを知っていた俺たちは1-Cの札が下がっている教室に入る。

「クラス分けはランダムなんだな」

クラスを見回してレイが言ったが、総司はため息交じりに答える。

「1年は基礎的な学習と実技の授業のみだからだよ。2年になれば実力順でクラスが決まる…… って資料に書いてあっただろ？」

「そんなもんいちいち見てない！」

自慢するかのようにつづいてレイに更に大きなため息をついたところで、予鈴が聞こえたので五十音順に席に着いた。

3話 担任!?

チャイムが鳴ってから約5分、入学式が行われると思ったが案内する担任が来ない。さすがに他の生徒もざわめき始めた。

そのとき、

『がらっ!』

突然の扉の開く音で教室内全体に緊張が走る。

「おつす。じゃあ授業始めるぞ〜」

眠そうに話す担任? らしき人の発言に全員が驚きを隠せない。

「先生! 入学式はやらないんですか?」

クラス全員の疑問を代弁するように真面目そうな女の子が質問を投げかけた。

「あ? お前らはこの学校に何を学びに来たんだよ? 将来にギルドに入って個人で活動する者や軍隊に入りたいからだろ」

「いつまでも誰かが護ってくれてるなんて思うな。ここでは命のやり取りを学ぶんだ、へらへらしていると死ぬぞ」

すらすらと資料を読み上げるかのように喋る教師を前に教室内の全員が圧倒され、今後の高校生活は自分達の思っている以上に壮絶な

ものになるのだろうと決心したのだ。

「あゝ忘れてた、俺はお前たちの担任のロック・ブルードスだ。ちなみに筆記も実技も俺が担当する」

だるそうにかつ一方的にそう言つと授業を始る。

(そう言えば、入学案内には入学式なんて一切書いてなかったか)

そう思い起こす総司は啞然としている他の生徒より冷静だった。

4話 初授業

「よし、じゃあ基礎の基礎から質問していくから指名されたら答えろ」

一方的に始まり、一方的に進んでいくロックの授業。

「よし、魔法の属性について知ってる事を答えろ。じゃあ……レ
イ答えろ」

一方的な命令形に少しイラツときたのか、レイは不機嫌そうに返事をして立ちあがった。総司は中学の頃からレイを知っているため、こんな初歩的な質問は完ぺきに答えるのだろうと期待していた。

「魔法には六つの属性が存在していて、光、火、風、闇、水、土が存在している。それらの関係は六芒星で表すことができ、上向き三角の上に光、左に水、右に風が表され、下向き三角は左に土、右に火、下に闇があてはめられる、それらを合わせると対極にくる属性が互いの苦手な属性となる。補足として各属性には象徴とする色があり光は白、火は赤、風は緑、闇には黒、水は青で土は茶色となっている。ちなみに瞬間移動などは無系統に属されていて、誰でも習得できるが難易度は非常に高い」

「……驚いたな、教科書丸暗記のうえにそれ以上の回答だ」

ロックが言った通り、レイは教科書に書いてある説明に補足まで付け加えた。さすがにこの行為にはロックや他の生徒は啞然としている。

「……」

ロツクの問いに無言で肯定し、席に着くレイ。その頃総司は、朝と全くキャラが違うなどとうでもいいことを思っていた。

「じゃあ次は…… サラ・ロレア、魔法を使うのに必要な条件を言ってみる」

レイの時と同じ命令形でロツクは指名すると、気の弱そうな女の子が立ち上がった。

「は、はい。魔法を扱うためには媒体となる物が必要になります。それは、魔力を込めて作られた各種武器や杖などに始まり指輪などの装飾品があり、それらを魔具と呼びます。今あげた物の他に魔導書がありますが、魔導書は自分で書き込んで使用する物なので使用者自身が魔法に関する詳しい知識が必要とされます、その代わりにオリジナルの技の発明が可能です。また、魔具は作られるときに込められた魔力が強く、自分の魔力と適合するものほど魔法の威力は増します。その点でも魔導書は使用者の魔力が込められるので威力は強力なものになります」

「よし、上出来だ。このクラスはなかなか賢い者が多いようだな」

その後も基礎の基礎を復習し、次の授業の連絡も無しに教室を出て行った。

5話 検査

「あゝ、さっき言い忘れた、これから魔力と属性の検査をするぞ」
休み時間を終えて教室に入ってきたロックの第一声。それは名前の通り魔力の量と属性を検査すること。属性は六種類あるが一人一種類の属性しか使えない事は常識である。

握力計のような機械と占いに使われるような丸い水晶、それを使って検査をするらしい。

「はあゝ、きたか」

総司はこの検査が大嫌いだった。過去にこの検査をやった時は魔力は皆無、故に属性も存在しなかったのだ。どうせ変わらない結果を見るだけだろうと思うと元より高くない総司のテンションは更に下がっていた。

「よゝし、じゃあ番号順に並べ」

総司の気持など知るよしもないロックは検査を始めるために生徒を並ばせる。

「えーと、ブラウ・アルシスからだな」

そうロックが名前を呼ぶと見るからに元気そうな女の子が、ガツと立ち上がり教卓においてある握力計のような物を握った。

「魔力は二千か…… 魔法は苦手な方か？」

遠慮なくロツクはブrouに聞くと、苦笑いをしながら水晶に手をかざす。

「緑か、風属性だな。はい、次ー」

ロツクは記録をボードのような物に書き込むと次の生徒を呼び流れ作業を始め、すらすらと検査は進んでいった、総司が検査をする前までは……

「次は、紫雲 総司」

圧倒的に和名が少ないので注目を浴びる。それに加えて、紫雲という苗字は魔法戦闘で確たる地位を築いた名家とあって他の生徒がざわつく。おそらく結果を知ればもっとざわつくだろう、もちろん悪い意味で。と総司は内心で思いつつ教卓に向かう。

結果を見るのが怖いので目を瞑りながら握力計を握る総司。

「あ？ エラーだと？ おかしいな、故障か？」

どうやら運悪くエラーが出たらしい。総司としては一刻も早くこの場から脱したいのだが。

「わりい、職員室に探しに行ってくるから待ってる」

一方的にそう言うで一瞬でロツクの姿が消えた。生徒達は一瞬驚いた表情をしたがすぐに騒ぎ始める。

「あれって転移魔法だよな？」

「ああ、けど座標の指定早すぎじゃね？」

「実はあいつめちゃめちゃ強いんじゃない？」

「俺、大人しくしてよ〜っと」

転移魔法とは、俗に言う瞬間移動である。だが、転移するには目標の場所を正確に理解して座標を指定しなければいけない。座標の指定を誤ると、壁や物に体がめり込むという恐ろしい状態になる為に座標指定には少々時間が掛かるものである。

各々の感想を話し始めていたが総司とレイは違和感を感じていた、今まで正常に動いていた計測器が突然壊れるものだろうか……

そんなことを考えているうちにロックが突然現れた。

「よし、再開するぞ〜。予備が残っていてよかった」

最後の方は独り言に近かったが、総司は気にせず計測器を握る。

「…………い、一万五千!?!」

ロックの言葉に教室内がいつも以上のざわめきを引き起こす。

「お前、何者だ！ 中学での記録は魔力無しだと聞いていたぞ」

「いや、なんででしょうね。俺も分かんないっす」

すごい剣幕で聞いてくるロックに総司は他人事のように答える。助けを求めてレイの方を見るが、レイも首を傾げるだけ。それも仕方

ないことだ、自分にだって理由が分からないのだから。

「黙れ」。属性はなんだ？」

騒がしい生徒に対して気だるそうに叱り、総司に続きを促す。

今まで魔力が無かったために属性も分からなかったので総司自身もドキドキしながら水晶に手をかざす。

そこに表われる色により、総司の高校生活は賑やかなものとなる。

6話 総べてを司る

「むっ、紫か……」

予想してたかのように呟くロツクだが、他の生徒達は紫が示す属性を知らない。それはもちろん総司も例外ではなかった。

「おい紫雲、ちょっと校長室に行くぞ」

その言葉だけ聞いた総司はロツクに連れられて転移していった。

「失礼します」

ロツクはいつもと違い、しまった顔にはつきりした声で大きく重厚そうな校長室の扉を開けると、その先には長い髭を生やした男が座っていた。

「これは、ロツク先生。どうしました？ 今は授業中では？」

ロツクの蒼い瞳が真剣さを更に持たせる。

「それが、水晶で属性を検査していたところ…… この紫雲 総司が紫を出しました」

「なんと！？ 魔力はどうなったんじゃ？」

「い、一万五千です……」

恐る恐るという言葉に当てはめるかのようにロックは答えた。

「なんと……　ところで、紫雲と言ったな、君はあの紫雲家の者が？」

今度は総司に向かって投げかけられた問い。

「生まれたのはその紫雲家ですが、今は関係ありません」

「どづいつことじゃ？」

学校長が不思議そうに聞いてくる

「僕は生まれたころから魔力が無かったので、このままでは歴史ある紫雲家の名に傷がつくと思ったので自ら家を出ました」

少し嘘は混ざっていたが、結果として質問には答えられたので問題ないだろう。

「そうか、しかし今になって魔力が覚醒するとはな……」

そもそも魔力が皆無の状態から一万五千へ成長するなどあり得ない。魔力とは日々の修練等により成長するのだから。校長は独り言のように呟くと、ロックと総司を見て話し始めた。

「理由はどうあれ魔法が使えるようになったのは事実のようじゃ。そして問題の紫の指す意味じゃが……　紫は『全属性』を指し示すのじゃ。まあ、詳しいことはクラスでブルードス先生に説明してもらおう。あまり噂を広げるでないぞ、全属性が使える人間など百年

に一人の逸材じゃからの」

「分かりました、では教室に戻ります」

ロックはそう答えて再び転移した。

7話 変化

教室に戻ると、他の生徒達は慌てて自分たちの席に着いた。どうやら総司の事を話していたようだ。

「よし、すまなかった。このことは後で説明するから先に検査を終わらせるぞ〜」

ぶつきらぼつにそう言うと、他の生徒達の検査を終わらせた。ちなみにレイは光属性の魔力は八千だった。平均的な高校一年の魔力は大体六千くらいなのでレイは十分に優秀である。しかし、総司の魔力は軽く高校レベルを凌駕したものだっただ。

「よし、じゃあお前らが一番気になっている話題に移るか。紫雲、全部説明してもいいか？」

おそらく家庭の事に対してのロツクなりの配慮だろう。だが、総司的には特に気にもしていなかったので、縦に首を振った。

「まずは水晶に現れた紫だ。あれは教科書などには載っていないが、全属性を司る色だ。そして知っている者は少ないかもしれないが、紫雲は今まで魔力は無かったらしい。詳しい理由は分からないが俺の推測ではお互いの属性が打ち消し合っていたんだと思う」

ロツクが言い終わると、レイが手を挙げた。

「先生、でもそれなら何故今になって魔力が現れたんですか？」

「まあ、これも俺の予想になるが、自分で無意識に全て抑制してい

たんだろう。一万五千の魔力ともなれば、ガキには制御できない、だが高校生になって魔力が打ち消し合わない程度に制御ができるようになったってことだと思う」

ロックが冷静に分析する。

「ということは、制御がもっとうまくなれば魔力の総量が増えるかもしれないってことですか？」

レイもいつになく真剣な顔でロックに問う。

「俺の考察が当たってれば、そういうことになるだろうな」

ロックの言葉に動揺が隠せない生徒達。それも仕方のないことだろう、自分たちの魔力を圧倒的に超える人間が同じクラスにいるのだ。自信をなくしてもおかしくはない。

「まあ、そういうことだ。じゃあ授業は終わりにして昼飯だ。午後
は実技だから演習所のBに集合しろ」

そう言い残しロックは去って行った。

8話 出会い

今は昼休み。大勢の生徒が廊下を歩き来し、賑やかな教室。総司とレイは嵐のような購買から勝ち取ったと言っても金を払う等の手順はもちろん踏んでいるが サンドウィッチを食べながら話をしていた。

「しかし驚いたな、総司に魔力が現れたなんて」

「なんだよ、魔力があつたらいけないみたいなのセリフだな？」

総司は本心では思ってもない言葉を返す。理由などレイの顔を見ればすぐにわかるだろう、他人の事だというのにまるで自分にいい事があつたかのような笑顔。それは名に恥じない光り輝くような笑顔。彼が女子の厚い支持を得ている理由はこれだろう、と考えていた時不意に後ろから声を掛けられた。

「ちよいと失礼、あんたが紫雲 総司か」

そう言いながら元気そうな女の子が横に移動してきて総司を見る。

「誰？」

雑談を邪魔されたせいか少しムツとしたように 　しかし悪意は表に出さず 　レイが質問する。

「ああ、失礼。あたしはブロウ・アルシスだ。そこでこっちは親友のサラ」

「は、始めまして、サラ・ロレアです。属性は一応水です」

ブラウとは対照的な臆病　人見知り？　らしい。

そんな考察をしている時、

「俺はレイ・ヘイスト。属性は光だ」

「知ってるみたいだけど俺は紫雲総司、属性は全部使えるらしいけどまだ使ったことが無いからなあ」

総司は思っていることを素直に話す。

「ところでブラウって最初に検査やってたよな？」

と、質問するレイを見て総司はさり気無く名前と呼ぶんだな、なんて感心していた。

「よく覚えてるわね。ってことは、魔力が低いこともばれてるか…」

ブラウがそういった瞬間に少し、ほんの少しだが寂しそうな表情を見せたがすぐにさっきまでの明るい顔に戻った。今の出来事にはおそらくレイも気づいてるだろう。

「まあな。サラは魔力どのくらいあるんだ？」

あまり触れない方がいいと判断したのだろう、適当に答えて話題を移す。

「わ、私は八千五百です……一応」

『えっ！？』

予想以上の大きい数字に総司とレイは驚きを隠せず、世界の広さを感じた。

「ま、まあ同じクラスなんだ、これからもよろしく」

珍しく動揺してるレイの言葉に、こちらこそと笑顔で返す二人。それを見計らったかのように予鈴が鳴ったので演習所に四人で移動した。

9話 実技授業

ここは演習所B。校舎の外に設営された大規模な演習所。と言っても演習所Bはまだ狭い方らしい。

「よし、全員揃ってるみたいだな」

「これより実技訓練を開始する。実技と言っても今回は標的に向けて魔法を放つだけだ」

ロックはそう言うのと百メートルほど先に三つの土の標的を作り上げた。どうやらロックは土属性の魔法を使うのだろう。

「じゃあ、誰からでもいいから三列に並んで一回ずつ攻撃してくれ。俺は威力を見てるから」

そう言い残し百メートル先に移動していった。

しかし誰からでもいいと言われると人はなかなか自分からやらないもので……

「どうしたー？ 時間が無くなるから早くやれ！」

ロックが大声で叫び始める。どうするかと考えてる時、レイが先頭に出た。

「いきまーす」

気だるそうにそう言うレイは左手にどこからともなく媒体として

使っている弓を出す。無言で弓を引く動作をとるがその手に矢は無
い。その直後弓が鳴った、それは退魔を意味する音、そして放たれ
る闇を払う光の矢。

真つ直ぐ進んだ光の矢は的の中心を貫いた。

「初級魔法で俺の的を貫通するのか……　すごい威力だな」

おそらく他の生徒には聞こえないだろうがロックは呟く。

その後は自然と他の生徒がどんどん挑戦していく。こういうものは
誰かが先頭を切れば後はどんどん挑戦していくものだ。

だが総司には悩みがあった。それは、もともと魔法が使えなかつた
ので媒体がないのだ。

悩んでいるうちにどうやら他の生徒は全員終わってしまったらしい。
みんな総司を見ている。

「あゝせんせー、俺媒体ないっす」

おそらくこの総司の一言は誰も想像しなかつただろう。

「うーん、土属性の魔法しか使えないけど俺の指輪貸してやろっ」

そう言ってロックから指輪を貸してもらった。それを右手の人差指
にはめ着的に向けて初級魔法を放とうとした。

普段から冷静な総司も人生初の魔法はさすがに緊張しているようだ。
その時！

『パキンッ』

どこからか少し小気味のいい音が聞こえたと思った瞬間に指輪が砕けた。おそらく総司の魔力に耐えきれなかったのだろう。

「あつ！ お前、それ特注なんだぞ！」

ロックがものすごい剣幕で怒鳴る。その後、職員室に呼ばれたのは言うまでもなかった……

10話 魔具

「しかし、みっちり絞られたみたいだな」

「まさか壊れるなんて誰も思っただろ」

馬鹿にするように笑っているレイに答える。今は放課後、ロツクに自分の魔具を用意するように言い渡され買いに行く最中である。

他の生徒が使っているような指輪の魔具は市販の物で他人が魔力を込めて作ったものだ。武器型の魔具を作る場合は魔力と属性を検査してそれをもとに希望の武器を作るのだ。

魔具にも属性が存在し、普通の場合は一人一つの属性しか扱えないので媒体は一つで十分だった。しかし、総司は全属性分　つまり六つ　媒体が必要になるのだ。

「ところで、総司は魔具は何にするんだ？」

「もちろん指輪しかないだろ」

「え？　なんでももちろんなんだよ？　お前いろんな武器の練習してたじゃん」

当然かのように答える総司にレイは素直な疑問をぶつけた。

「もちろん魔法が使えなかった分、武器の練習には励んだけど魔法が使える今は話が別だ。たとえば剣の火属性を媒体として用意しても、いざ水属性と剣を使いたくなっただ場合どうする？　各武器を6

種類用意するのも無駄だろう。だから武器と媒体は別にするのが効率的ってものだと思うが」

「なるほど、贅沢な悩みだ」

茶化すかのように言うレイだったが、反応する必要もないだろうと思ひ指輪を探す。

「いいのあったか？」

心配そうにレイが聞いてくる。

「いや、今さらだが市販の魔具は俺の魔力に耐えられなさそうだ」

「うーん……じゃあ特注しかないか、金はあるんだろ？ それなりにいい店に入ってオーダーしようぜ」

そう言って高いことで有名な店に足を踏み入れることにした。

11話 ショッピング

「……いらっしやいませ」

おそらく総司達学生が入ってくるのが珍しかったのだろう、店員は間をあけて挨拶をした。

「今日はどうな魔具をお探しで？」

低姿勢な男が総司に話しかけてきた。

「えーっと、全属性の指輪をオーダーで作りたいんですけど……」

全属性、つまり六個の指輪を特注で作りたいという言葉は、店員を硬直させるのに十分すぎるセリフだった。

「ぜ、全属性ですか？ オーダーメイドとなりますとご本人様の魔力を測りたいのですが……」

おそらく人数が足りないと言いたいのだろう

「あ、僕一人で全属性だから検査は一回でいいですよね？」

「さ、左様でございますか。構いません。では、検査室へどうぞ」

おそらく店員も何をしようとしているのか理解できないだろう。圧倒されっぱなしの店員に連れられて総司とレイは店の奥に入った。

学校と同じ手順で魔力を測った結果、二万という数値が記録された。

「おい総司、いつの間に魔力上げたんだよ」

硬直する店員をよそに冷や汗を流しながらジト目で見てくるレイ。

「知るか、自分でも驚いてるんだから」

苦笑いで答えると、我に返った店員が話しかけてきた。

「申し訳ありません、お客様。責任者を呼んでくるので少々お待ちいただけますか？」

そう言っつて更に店の奥に走って行った。

12話 ショッピング2

「お待たせいたしました、店長のトマスと申します。お客様はどうやら魔力が二万と伺いましたが……」

「え、ええ、そうみたいです」

出てくるなり一方的に話しかけてきた店長に少したじろぎながら答える。

「左様ですか。二万の魔力を制御する指輪ともなりますと、少々値が張りますが……」

「そのことは多分大丈夫だと思います」

家からの仕送りで余った金をこんなところで使うとは思っていなかったが、とりあえずこれで魔法が使えるようになる、そう思うとひと安心できた。

「では、二時間ほどいただければすぐにお作りいたしますが？」

「じゃあお願いします」

そう言うと奥のVIPルームとやらに案内された。高級な魔具を六個も作るのだ、当然の対応だろう。

案内されたときにレイは用事があると言い残しどこかに行ってしまった。自分もついて行こうかと聞いたのだが、珍しいことに拒否された。

つまり今後約二時間を一人でつぶすことになるのだ、さすがに気分が重い。

気がついたら時計の短針はもうすぐ二週するところだった。どうやら用意されていたソファで寝てしまったらしい。

「お目覚めですか、完成いたしましたよ」

そう言いながらクッションのような物の上に白、赤、緑、黒、青、茶色の色の石が付けられた六個の指輪が乗っていた。

「すみません」

どうやら待たせていたらしいので、一言謝罪して指輪を受け取る。光、風、水の指輪を右手の親指と人差し指と中指に、闇、土、火を左手の同じ指にはめると指輪が輝きを増していた。

予想していた金額より少し少なかったのは店側の計らিদらう。支払いを終えた総司は店を出て帰宅の途についた。

13話 魔導書

俺こと紫雲総司は金の大切さについて裏路地でじっくり考えていたところだ。

なぜ今金の大切さについて考えているかというと、それは約3分前に遡ることになる。

約三分前

俺は新しく買った魔具を指につけながら、これに使った金とこれらの生活にあてる金額を調整していた。

仕送りのおかげで買うことはできたものの、決して安いわけではなくある程度生活を切り詰める必要があったのだ。

「うーん、とりあえず食費を少し抑えるか」

そんなことをぼやきながら家への近道となる裏路地を通っていた時に変化が起きた。

「君！」

突然後ろから声を掛けられたのだ。後ろということはつまり今通ってきた場所だがそこには誰もいなかったはずなのだ。

内心驚きを隠せなかったし、後ろを振り向くのも少し怖かった。しかし、足を止めてしまった以上は振り向くしか選択肢が残されていないなかった。

意を決して後ろを振り向くと、そこには紫色のフードを深く被り表情がはつきりと見えない不気味な男が立っていた。

なぜ顔が見えないのに性別がわかったのかと聞かれると、掛けられた声から察したためである。

「君、面白い魔力を持ってるんだね」

いきなりそんなことを言われたのだが、見ただけで魔力が分かる人なんて聞いたこともなかったし、見たこともなかった。

「ふふっ、これあげるから大切に使ってね」

不気味に笑いながら俺に一冊の本を渡してきたので、何か分からなかったがとりあえず受け取り表紙を見ると、紫の表紙には文字は一切書かれておらず、六芒星だけが書かれていた。受け取った瞬間に魔導書だとすぐにわかった。なぜなら、その本は淡く輝いていて総司の魔力に耐えていた。

その後すぐに顔を上げるとそこにはすでに人の影は見られなかった。本を受け取り顔を上げるまでは一瞬だったはずなのに消えていた。

夢だったかのように錯覚するような出来事だが、存在するはずのない全属性対象を意味する紫の表紙の魔導書が現実だと語りかけていた。

そこで気がついた事……

それは、こんな魔道書が存在すると知っていれば高価な指輪など買

っていなかったという後悔だった。

14話 部活動

紫の魔導書を謎の男に貰ってから数日後、総司は自分の席につきあることに関して考え事をしていた。特に重大な悩みという程ではなかったが一度考えだすと周りが見えなくなるもので……

「……おい！ 総司！」

レイが大声を出していたのに気がついた。かなり大声を出していることから、相当自分の世界に入り込んでいたのだろう。

「ああ、レイか。どうした？」

「『どうした？』はこっちの台詞だって！ ……まあいい、総司は部活か委員会に入るのか？」

レイは昔から総司が考え事をしていても総司から相談を持ちかけない限りは自分からしつこく聞きだしたりしない性格だ。レイがそれを意識した行動ではないとしても総司としてはありがたかった。

「とりあえず部活はやらないな」

あまり考える素振りをしないであっさりと総司は答えた。

「なんでだ？」

「文化部は興味ないし、運動部に混ざるほど俺は熱い男じゃない、剣術部や魔法剣術部には興味があるが……」

その先を濁す総司だったがレイにはすぐに理解できた。ちなみに魔法剣術とは、その名の通り魔法複合型の剣術だ。

「なるほど、お前と普通の高校生レベルだと差がつきすぎか」

それはもちろん総司が上という意味でだ。魔法の合間に剣術を学ぶのと、魔法が全く使えないため一心不乱に剣術を学んだ者では差がついて当たり前だった。そもそも昔は魔法が使えない為に落ちこぼれと罵られ、教師連中にも相手にされなかった事を考えると自然の流れとも言える。

そして、その差をさらに大きくしたのが「紫雲家の血」だ。紫雲家は剣、槍を使用した白兵戦をはじめとして、生まれつき恵まれた有り余る魔力での遠距離魔法を放つなど、まさに戦闘のプロフェッショナルだった。その血が大きく総司に味方したのだ。

紫雲家の武勇伝として、この世界の2大大国の1つであるテナードと今現在住んでいるアビニオンが戦争をしていた時代、当時の紫雲家当家が水平線の向こうに待機するテナード軍に対して雷を落とすといった超長距離魔法を放つたのだ。雷獣と呼ばれ敵から恐れられた先々代の活躍は当時の軍人に知らない者はいないだろう。

その戦争は言うまでもなくアビニオンが勝ち、国土を広げたのだ。た。

閑話休題。

「まあ、一概には言えないかもしれないけどね」

そう一言付け加え、実力に差があることを肯定する。

「じゃあ、委員会は？」

「委員会ねえ……」

どちらともとれない曖昧な答えは空に溶けて消えた。

15話 委員会？

「生徒会は生徒による自発的で自治的な組織で学校生活の充実を図っているわ。その他の委員会として、執行委員会、予算委員会、臨時委員会、部活動代表者会、監査委員会等があるけど、監査委員会だけは生徒会や教師の影響を受けることのない独立的な組織よ」

やけに早口で話すのはブロウだ。

「みんな堅苦しそうだな。ってか意外に詳しいんだな」

総司はブロウの説明に素直な感想を言ったのだが、

「意外ってどういう意味よ？」

突っ掛かってきた。

「でも強制じゃないんだろ？ サラは何か立候補するのか？」

華麗にスルーを決めた総司はサラに話を振る。

「私は生徒会の書記に……」

いつもは控えめなサラが予想より大きく出たので三人は言葉を失った。

「まじか……」

「意外と大胆だな」

レイと総司は呟くように言うと、サラは慌てて否定した。

「ち、違うの！ 実は生徒会長の立候補者は一人だけしかいないんだけど、その人に推薦されたの」

監査委員会以外の各委員会には生徒会長推薦枠が設けられてある。サラはおそらく、ほぼ確実に生徒会長になるその人に書記として招かれたのだろう。もちろん生徒会長推薦枠は無理に人を当てはめる必要はないが、それでもサラが推薦されるのも一重にサラの性格と人脈のお陰なのであろう。

「すごいじゃん。頑張れよ」

他人事のように 事実他人事だが 総司が笑顔でサラに言ったが、その笑顔は見事にサラの次の言葉で崩れ去る事になる。

「総司君も頑張ってくださいね！」

「……えっ!？」

16話 推薦!?

「俺が何を頑張るの?」

総司が先ほどのサラの発言に対して質問を投げた。むしろ投げざるを得ない。

「えっ? 執行委員会に立候補するって聞きましたよ?」

サラは長い茶色の髪を揺らしながら首をかしげる。しかし彼女の言ったことは根も葉もない噂であって総司自身も知らなかった事である。それを疑うことなく信じていたサラは所謂ところの「天然」というやつかもしれない。

「俺が? なんでそんなのに入らにゃいかんだ」

驚きのあまり口調がおかしいが他の三人はつつこまなかった。

「だってクロア先輩も総司君が入ってくれるとうれしいって言ってましたよ」

「クロア?」

総司は聞きなれない名前を疑問形にして復唱する。

「あつ、さっき言ってた次の生徒会長候補です。昔から仲良くて優しいお姉さんなんですよ」

「で、その人がなんで俺の名前を知ってるんだ?」

総司が矢継ぎ早に質問を投げかける。が、質問に答えたのは意外にもレイだった。

「おいおい、この前の検査であんな騒動を起こしといて何言ってるんだ」

呆れたと言わんばかりに手のひらを上に向けるようなポーズをとったレイに「故意ではない」と反論したかったが、最早検査結果は全校に広がった様なので手遅れだと気付いた。

「そーいうこと。今やこの学校で総司君を知らない人はいないんじゃない？」

ブラウがニヤニヤしている。

「とりあえず明言しておくが立候補などしないからな」

総司が冷たく言い放つと、サラは笑顔で、

「もし噂が嘘でもあたしが推薦するってクロア先輩が言ってたよ？」

「終わった、俺の静かで平穏な高校生活が終わった……」

「あの検査結果の地点で終わってたと思うけどね」

清々しい笑顔でつつこむブラウに反論する余力は総司には残されていなかった。

17話 生徒会

他の委員会に先駆けて生徒会役員は決定する。それは他の委員会の選挙を管理し監視するためである。

総司の執行委員会立候補の噂から一週間、生徒会長は予想通りサラの知り合いであるクロア・クラックと言う女生徒に決まり、サラも事前の情報通り書記として生徒会長自ら推薦し当選した。

今は昼休み、いつもの四人で購買に向かっていたところ　総司としては運悪く　クロアに出くわしたのでサラが挨拶をしているところだ。

ふとサラとクロアの視線が総司を見る。いきなり見られて少し驚いたが、おそらくサラが総司の事を紹介したのだろう。クロアが総司に向かって歩いてくる。

「あんたが総司君？」

茶色の髪とそれより少し深い茶色の瞳、身長は四人の中で一番低いサラと同じくらい。だがサラと違い出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいるという大人っぽい魅力と無邪気な笑顔のギャップに総司は少しドキッとした。

「はい、紫雲総司と申します。この度はご当選おめでとつございませす」

総司は動揺を隠すために敢えて形式的な挨拶。

「ありがとう。ところで総司君、ひとつお願いがあるの」

「なんででしょう?」

お願いとやらの内容は軽く予想できたのでそっけなく 表向きは笑顔だったが 質問した。

「あらかた分かっていると思うけど、執行委員会に入ってもらえないかしら? 執行委員会とは、生徒会の決めた行事の執行はもちろん、校内で騒動が起こった時に止める等の治安活動と処罰の執行も執行委員の職務に当たるわ。騒動を止めるためなら実力行使も伴わないと規定されているのは生徒会役員と執行部会の役員だけに許された権利です」

お返しとばかりに形式的な口調で説明した。

「サラから間接的に聞いてるとは思いますが僕は執行委員会に入るつもりはあ……」

「りませんとは言わせないわ!」

頬を膨らませて睨みつけるクロア。本人は威圧しているのだろう、だが身長差的に下から見上げる視線は怖いというより可愛いと言われる分類だ。子供が我が儘を言うかのような顔を見る限り諦めてくれなさそうだ……

「でも1年の僕がそんな大役でいいのでしょうか?」

執行委員会は生徒会の推薦がなければ入れない。それは生徒会が認める実力者達を集めるためだ。そのため執行委員会の人数は決めら

れておらず、基本的に少数精鋭で組織されている。

「そうなのよね、現在在籍しているのが一ノ瀬^{いちのせ}さんと寿山^{ひさやま}兄弟だけ…… 総司君を入れても四人だけなのよね。まあ居ないよりいいし、何とかなるでしょ！」

自分が人数に入っていることはもうつつこまなかった。最後の方は頭数合わせの様な言い草だ。

こうしてほぼ強制的に執行委員会に入ることになってしまった……

18話　メンバー

そんなこんなで総司は生徒会室の前に来ていた。クロアに「執行委員会のメンバーを紹介するから放課後に生徒会室に来てね」と語尾に音符がつくような笑顔で言われた為である。

「失礼します」

コンコンツと二回茶色の木でできたドアをノックし部屋に入る。一応相手は先輩なので礼儀はそれなりにしっかりしとく。「それなりに」と言っている地点で礼儀正しいとは言えないが。

「おゝ来た来た！　彼が紫雲総司君、これからは執行委員会の一員よ！」

ドアを開けた瞬間にクロアが総司を紹介した。生徒会室は普通の教室の倍はある広さで、中央に会議用の長机が並べられてあった。広い部屋だがなぜか四人しかいなかった。一人は机に突っ伏して背を向け寝ている、もう一人は寝ている男の向かいに座り総司を見ていて、もう一人は窓際に椅子を動かして読書をしていた。そしてあるうことにクロアは机に座り椅子に足を置いている。

つつこむか悩んだが自己紹介を疎かにするほど子供ではない。

「はじめまして、1-Cの紫雲総司です」

簡潔に自己紹介をすると、寝ている男の正面に座っていた黒髪で切れ目の男が立ち上がった。

「はじめまして、執行委員会長の一ノ瀬誠いちのせまことだ。よろしくね」

素敵な笑顔だったがどこか後ろから出るオーラが黒く、裏があるような笑顔。この人は怒らせない方がいいと野生の勘が働いた。制服のブレザーを着てネクタイをしつかりと締め着こなしている。すらっとした体形だが胸板や肩幅はがっちりとしていて、身長も総司より高い。

「ほら、お前らも自己紹介しろ！」

一ノ瀬はそう言って寝ている男の頭を平手で叩き、窓際で読書している男に目を向ける。すると寝ていた男がぶつぶつ言いながら立ち上がって、

「寿山劫亮ことせまひつとせ」

簡潔すぎる。そうつつこみたくなったが、初対面なのでやめとこう。

「はじめまして、寿山 烙耀らくようです。そっちの馬鹿は僕の兄で二人とも閻属性だよ。よろしく！」

そう優しそうな笑顔で言った烙耀。性格は全然違う様だが、外見は全くと言っていいほどそっくりなのである。二人とも真っ赤な髪に赤の瞳。外見で違うところを挙げるとするなら、烙耀だけはメガネを掛けているということだ。身長は総司と同じくらいで、百七センチを少し超えているくらいだろう。

ちなみに、三人とも三年である。

見るからに個性的なメンバーだがこれから大丈夫だろうか……と内

心ため息をついた。

19話 創設祭

「でもなんで生徒会室で屯してるんですか？ 執行委員会には部屋が無いとかですか？」

適当な椅子に座り総司が一ノ瀬に向けて質問をすると、苦笑しながら答えた。

「あるか無いかって聞かれちゃうと無いかな。執行委員は生徒会との連携を重要視するからこの部屋が生徒会室兼執行委員会室って感じかな」

なるほどと思い頷く総司だったが、次の疑問が浮かぶ。

「執行部員はこれで全員と聞きましたが、生徒会役員は……」

どうしたのかと聞く前にクロアが口を挟んできた。

「創設祭の準備よ。来週は我が校の創設祭だから各クラスの出し物や場所の管理したり、舞台を作ったりしてるの。知らなかった？」

知ってて当たり前と言外に言われた感じがしたので、担任である口ツクの連絡事項等を記憶の引き出しから出そうと探してみるが見当たらない……

記憶力には自信がある。どうやら連絡ミスだろう。

(腐れ教師が……)

がははと笑うがたいのいい担任を思い浮かべ思いつきり殴りつけた。
もちろん現実でそんなことできるわけもないが。

「どうやら担任の連絡ミスですね」

自分のミスではないにしてもどこか恥ずかしくて苦笑する。

「創設祭の連絡を忘れるなんて教師にあるまじき……」

「で？ 担任は誰なんだよ」

クロアがぶつぶつと呟いていたが、つつこむ度胸もないのでスルーして珍しく といっても普段をそこまで知っているわけでもないが 劫亮が話してきた。

「ロツク先生です」

「大当たりじゃないか！ あの人は教員の中でも一・二を争う実力の持ち主らしいからね」

総司が劫亮の方に視線を向けて答えると、今度は読書を中断して烙燿が答えた。

その時総司は意外性ならナンバーワンだな。なんてくだらないことを考えていた。

20話 初仕事

お茶を飲みながら　なぜか急須等が完備されている　雑談も一
休みしていると突然クロアが立ち上がった。

「じゃあそろそろ創設祭の準備の手伝い行ってくるね」

そう言い残し走って出て行ってしまった。他の生徒会のメンバーも紹介してほしかったが、またの機会でいいかと樂觀視して一ノ瀬に目を向けると、何が言いたいのか察したのか、

「そうだな、俺たちも仕事に取り掛かりますか」

そう言って立ち上がると、劫亮と烙耀もさつと立ちあがった。どうやら仕事に対しては規律を持ってしっかりやっているみたいで少し安心した。

「今回も劫亮と烙耀ペアで校舎内を巡回。トラブル発生の場合はお前らの判断に任せるが、極力穏やかにな」

一ノ瀬が指示を出すと、二人は生徒会室を出て巡回を始めた。

「じゃあ俺たちは、演習所付近の校舎外を見回るか。トラブルは大体外で起こるから気合入れろよ」

校舎に出て見回りを始めること約三分、総司の足は止まっていた。

なぜかと問われれば、一ノ瀬が囲まれているのだ。

一ノ瀬を囲む殺気……ではなく黄色い声。

ちよこちよこ聞こえるワードを結び付けて推理した結果、一ノ瀬は校内では「最強」というやつらしい。それも一二を争うなんてレベルではなく、圧倒的なレベルでの「最強」。

しかし、推理の元となったワードは女の子たちが発言した言葉ではなく、それを少し離れた所から見る男子生徒によるものだった。「いくら強いからって……」とか「天狗になってる」とか年頃の彼らにとつて一ノ瀬は、ルックスや実力もそうだが少なくとも影で悪口を叩くやつらにとつては性格の面でも超えられない壁だ。　　といつても、一ノ瀬に面と向かって「貴様、天狗になっているだろう」と言える人などいるはずもないだろうし、第一に一ノ瀬は天狗になつていない。

女子たちに囲まれている一ノ瀬は若干顔が引きつっているところを見ると、純情(?)というか硬派な人のようだ。

(さて、どうすりゃいいんだ?　こんな状況でトラブルが発生したらどう対応すんだか……)

呆れ気味に考えた総司だったが、その数分後に変なフラグを立てなければよかったと後悔することになる。

21話 事件

一ノ瀬が仕事だからと言いつきを振りまいて女子から解放されてしばらく歩いた先、そこでも女の子たちに一ノ瀬が捕まった。もう驚く気力もない、また解放されるのを待つのか……と途方に暮れていた時、

「キヤー！」

さっきまで聞こえていた黄色い声とは全く違う、女の子の悲鳴だった。

「総司！ 行くぞ！」

いつの間に女子の輪から逃げ出したのか、一ノ瀬が走りながら声を掛けてきたので総司も煙が上がっている方へ走り出す。

「おそらく演習所だろう」

一ノ瀬が横に並んだ総司に言って二人は更に加速する。

二人が演習所Bについたときには、二人の男が武器を持って向かい合い他の生徒は隅に逃げていた。

「今年も創設祭の準備における意見の対立か？」

一ノ瀬が粗方予想を立てて二人の真ん中に止めに入る。 対立し
あい睨みあっている二人の間に入るなんてなかなか度胸が必要だ。

「おい、お前ら！ 決闘なら生徒会に申請を出してからにしろ！」

そこを注意するのか、と思い呆れていると向かい合っていた二人が
同時に一ノ瀬に向けて魔法を放った。二人とも剣を媒体に使ってい
るようで、剣が薄く光って手のひらから炎が一ノ瀬に向かい伸びる。

「会長！」

炎が一ノ瀬とぶつかり総司が珍しく慌てて声を荒げるがどうやら心
配は無用だったらしい。一ノ瀬が右手の親指につけている指輪が光
り、分厚い土の壁が一ノ瀬を守っていた。

動揺した二人を相手に総司の出る幕は無かった。自分の足元から相
手に角柱を伸ばす 本人は牽制のつもりだったが、あまりの速さ
に相手のあごに直撃し倒れた。 残りの一人は炎の球を幾つか飛
ばしてくるものの、一ノ瀬は華麗に避けボディに拳をめり込ませて
幕引きとなった。

「強い」それが総司が一ノ瀬の戦いを見て感じたものだった。誰も
が思うであろう感想だったが、それしか言うことが無い程の圧倒的
な力と威圧感。魔法の発動の速さや威力は魔力に依存する、最初に
足元から伸ばした角柱だって並みの魔力ではあれほどのスピードは
出ない。さすが校内一と謳われる男だと素直に思った。

しかし油断は大敵である。最初に倒した男が覚醒し四つん這いにな
って背を向けてる一ノ瀬に反撃をしようとしたとき、校内を見回っ

ているはずの劫亮と烙耀が一瞬で男の左右に立ちおそろいの真つ黒な鎌を交差し首にあてがう。

二人の真つ赤な髪と瞳は血液を連想させ、真つ黒な鎌を首にあて見下ろす姿は死神を思わせる。どちらかが少し手を後ろに引けば簡単に男の首が落ちるだろう。

「何しようとしてんの？ 君」

「……」

笑顔で問うのは劫亮で、無言は男。ではなく、生徒会室で見た優しいような笑顔が一切もない烙耀で、その瞳には殺意までも伺える。

「まあ、喧嘩の勢いで犯した過ちって事で許してやるから気をつけるんだぞ」

このままだと殺しかねないと判断した一ノ瀬が一言気軽に声を掛けて事態は収束した。

22話 お説教

「問題を起こしたやつがいたらここに連行しなさいって言ったでしようが！」

怒鳴り声をあげているのはクロアで、どうやら問題の生徒を連行してこなかったのに怒っているらしい。

「知るか！　いーだろ、もう解決したとこだし」

半ば自棄になって反論する一ノ瀬だったが、いまだにクロアは喚いている。

「しかし、誠の攻撃を受けて立ち上がるなんてなかなか見込みあるんじゃない？」

そう言うのはシャーリー・ハインツ。3年生で生徒会副会長、楽観的でさっぱりした性格。というのが総司が抱いた印象。外見も金髪のショートカットでボーイッシュな感じが出ていて男女や後輩、分け隔てなく接しているようでさまざまな人から人気を得ている。

「馬鹿かお前は」

「なんだとお!?!」

「もちろん制御して魔法を使ってるだろう、全力で戦ったら人間が壊れちまう」

途中でシャーリーの反論があったが完全にスルーして何やら不吉な

ことを言う劫亮に烙燿も続く、

「それに状況から推測するに、あれは牽制程度だったんでしょ？」

しれつと言ったが、総司には「いつから見てたんだろっ？」と素朴な疑問が浮かび上がった。

（それにしてもこの人たち……生徒会長が居ないかのごとく話して
るよ）

心の中のつつこみを誰かに聞いてもらえる訳もなく、総司はため息をついた。

案外生真面目な生徒会長のお説教を真面目に聞く者など、生徒会にも執行委員会にも誰もいなかった。

23話 副会長？

クロアにはもう一人副会長がいると聞いていたが、今日は創設祭の舞台の準備で忙しく流れ解散なので総司も帰宅することにした。

生徒会の先輩がまだ働いてるのにいいのだろうかと考えた総司だが、そういう心配りをするのは執行委員会の三名に対してだけでいいかと結論付けて一人暮らしの家へと帰る。

ブロウとレイはもちろん先に帰っているはず、サラは生徒会に所属しているためまだ仕事だろう。

もともと魔法が使えずにクラスから省かれていた総司なので一人で帰ることに苦はなかったはずだが、高校に進学して1カ月になるが魔法が使えるようになって今までのような不平等な扱いも受けずに友達もできた。そのためだろうか、

「一人で帰るのもつまらないなあ」

そんな溜め息混じりの総司の愚痴は茜色に染まった空に消えていった。

総司がそのうち一緒に帰る人ができるとは知る由もない。

次の日、気になっていたので学校でサラにもう一人の副会長はどん

な人かを尋ねてみた。

「劉秀先輩りゅうしゅうせんぱいの事ですね。いい人だと思うんですけど、なんとというか……話しかけづらいといった感じですよ。気難しい人と言った方が正確かもしれません」

総司に尋ねられたサラが答えたが名前を出されても総司は分からない、しかしどうやらもう一人の副会長は劉秀と言っらしい。サラが思ったより毒舌だった事に驚いたが、聞く限りでは扱いづらそうだと予想した。

総司の予想通り、劉秀との対面は生徒会と執行委員会に波乱を巻き起こすこととなる。

24話 副会長

総司は劉秀とは面識が無いので、今日のうちに挨拶をしておこうと思いい生徒会室に入った。　　と言っても執行部員としての仕事もあるのでどちらにしる生徒会室には行くのだが。

「お疲れ様です」

何気ない挨拶をして室内を見回すも劉秀と思しき姿は無い。まだ来てないのかと判断しサラに話しかけようと思ったが、書類と向かい合っていたので諦めてクロアに話しかけた。

「劉秀先輩に挨拶をしようと思ったんですけど、今日は来ますか？」
　　退屈そうにしていたクロアが笑顔で答える。

「意外と律儀なんだね。劉秀の担当は今日は休みだからもうすぐくるところだよ」

担当とは創設祭の準備の担当場所ということだろう。

「意外とはどーゆーことですか？」

爽やかな笑顔でクロアに問い詰めようとしたとき部屋のドアが開いた。そこにいたのは、黒髪で短髪、鋭い目つきで常に警戒をしているような男だった。

「おお劉秀！ こいつが紫雲総司だ」

「1-Cの紫雲総司です、よろしくお願いします」

クロアの紹介に続いて挨拶をした。気難しいと聞いていたのもつと畏まった形で挨拶をしても良かったが、『高校生らしく』をイメージするとこんなもんだろと思った結果だ。それに予め劉秀は二年とサラから聞いていたので、一ノ瀬達にした挨拶より丁寧にするのも如何なものかとも思った。

「お前が噂の……」

「……生徒会副会長の劉秀だ。ちょうどいい俺も今日は準備が休みだ、一戦相手してもらおう」

また噂かなど思いつつ自己紹介を聞いていたが、最後のセリフには総司も耳を疑わざるを得なかった。

25話 挑発・思考

ここは実戦室E。今までに立ち寄った演習所とは別物で、『室』と名づけられているものの屋外である。生徒が個人で行う模擬戦や生徒会が主催する武術大会の会場に使用される部屋で、A～Cは屋内、E～Gは屋外となっている。

なんでこんなことになっているんだ。それが総司の気持だった。

事の発端は劉秀の「一戦相手してもらおう」という言葉だが、それを聞いた途端にクロアが目を輝かせて賛成したのだ。結局見回りもせずに生徒会と執行部会の全メンバーが観客として見ている。

総司は、実戦室E　Eは草原ステージ　で劉秀と向かい合っている。劉秀は左右の拳に黒いナツクルを付けていて、それは明らかに近接攻撃が主流の戦い方をするということだろう。そして魔具もあのナツクルだろうと予想はしておいた。

「ところで武器は持たないのか？　まさか、拳で殴り合うか？」

突然劉秀が話しかけてきた、というより挑発だが。

「……………そうですね、拳でやりましょう」

すこし間を置いて挑発に乗った、しかし当然拳だけで戦うつもりはない。むしろ拳すら使う予定はない。相手はナツクルを魔具にするほど近接戦闘を好んでいるのだ、そして二年で生徒会の副会長という実力を考慮した結果、魔法が主体の近寄せない戦法をとるつもりだ。故の拳すら使わないという考えである。

武器を持つなら指輪を使うところだが、今回は武器は無い。無
い訳ではないが、拳と宣言した以上使う気はない。そして相手
は軽快なフットワークで接近するタイプだろう。フットワークがい
い敵に対して既存の魔法　炎弾を放つなど　は直線的な攻撃の
為、回避されやすい。相手を寄せ付けないレベルの魔法を放つには
魔導書が適役だ。授業や執行部の仕事では指輪で事足りたため、魔
導書は初のお披露目になるな。

そんなことを考えながら何も無い空間から紫の魔導書を出す。宙に
浮いている本は薄く輝き始める。

準備完了と判断したのか、審判役のクロアが腕をあげた

26話 戸惑い

観戦していた生徒会と執行部会のメンバーは総司が当然かのように魔導書を浮かべたとき驚きを隠せなかった。隠すつもりもないだろうが。

「魔導書だよな？ あれ」

シャーリーが一ノ瀬に向けて確認をとる。

「ああ、明らかに魔導書だが……」

「紫の表紙なんて見たことないぞ」

一ノ瀬が含みを持たせて答えると劫亮が続いた。シャーリーはどちらかという和本気で驚いている様子だが一ノ瀬と劫亮の表情は新しいおもちゃを見つけた子供のように目を輝かせている。

「通常、魔導書は属性の色の表紙になるけど……」

視線を総司から逸らさずに烙耀が話す。

「そうだな、あれが紫の表紙ってことは全属性の魔法があれ一冊で発動できるってことだろう」

一ノ瀬も冷静を装っているつもりだろうが、額に汗が浮かんでいる。

「でも紫の魔導書があるってことは全属性が使える人が彼以外にいるってこと？」

シャーリーが質問した通り、全属性を操れる人など居ないと思われる。ていたため紫の魔導書は存在しないはずだった。

「ではいったい誰が総司君に魔導書を渡したんでしょうか？」

やっと話についてくれたサラの単純な疑問に答えられる者がいるはずもなく沈黙が流れた。

27話 模擬戦

「……始めっ！」

劉秀と総司を確認するかのようにちらちらと交互に見た後、クロアが手を下した。

先に動いたのは劉秀だった。正確には直立のまま魔法を発動させただけなので、動いてはいないが。劉秀の足元から総司に向かって地面が割れる。

総司の予想に反して魔法での先制攻撃。もちろん自分たちは魔法を駆使して戦う事を職業にしようとしているのだ、全く考えていないという間抜けな事はしていない。相手は魔法の発動と同時に動いてはいない、力試しと言ったところだろうか。

「土属性の中級魔法を確認。魔力の上乗せにより再生」

総司がそうつぶやくと自然に魔導書が劉秀に向かって開き、真っ白なページに文字が浮かぶのと同時にひび割れた地面が劉秀に向かって塞がれていった。

「あれって!?!」

サラが驚いて一ノ瀬に尋ねる。

「魔導書による魔法だな。本来は魔法を使うときに技名の宣言等は

必要ないが魔導書は別だ、予め書き加えておいたオリジナルの魔法は宣言なしで使えるがあいつのように何も書いてない場合は、口で宣言することで発動するんだ」

一ノ瀬が懇切丁寧に説明をするとサラはなるほどと頷いた。

「しかし、今みたいに相手の魔法を打ち消すには相当な魔力が必要なんだけどなあ」

誰も聞いていなかったが呆れたように一ノ瀬がぼやいた。

劉秀は魔法だけでは勝てないと判断したのだろう、角柱を総司に向けて伸ばし同時に走ってくる。

「……同属性の初級魔法を確認。風属性魔法で風化」

どう対処するか迷ったが総司は角柱に向けて風属性の魔法を放ち風化させる。

「敵の接近を確認。光属性魔法発動」
フリッシュユ

総司から発せられた光が辺り一帯を包み込んだ

28話 結末

観戦していた全員が視力を取り戻したとき見たものは、総司の足元にうづくまる劉秀の姿だった。

「えっ!？」

サラだけが驚きを口に出した。 と言っても驚いたのはサラだけではなく、他の者はあまりの一瞬の出来事に言葉を失っていた。

「……勝者、紫雲総司」

それはクロアも同じようで、かろつじて我を取り戻し勝者を告げた。

気を失っている劉秀を楽な体制になるように横にすると、一ノ瀬達総司のもとに駆け寄ってきた。

「すごいな！ まさか一瞬で決着がつくとは……」

「一瞬という程でもなかったですよ。目眩ましをした後、けりをつけようと思い接近してボディーブローを放ったんですが一発目は去なされちゃいました……」

総司が自虐的に笑いながら言い、そのあとは何とか決めましたけどと付け加えた。

「ところで総司君は……」

「やめとけシャーリー。魔法や魔具に関する詮索はマナー違反だぞ」

一ノ瀬にはシャーリーが魔導書について質問しようとしたのだと察知し注意した。が総司には何のことか分からず、頭上に疑問符が浮いた。

その後は目覚めた劉秀に挨拶をして帰宅。

劉秀はやはり気難しい性格のようで、そっけない返事をされたが仕方ないかと自分に言い聞かせておいた。　　そもそも総司は何も悪い事などしていないのだが。

1話 ゴシップ

ここはとある学校の生徒会室。

「総司君は転入生の噂聞いた？」

三日後に迫った創設祭に向けて書類整理をしていた総司に対して唐突に生徒会長であるクロアが聞いてきた。

「転入生……ですか？」

書類整理の手を止め、疑問形にして復唱する。

「やっぱり知らないんだ、こういう話に疎そうだもんね」

僅かながら馬鹿にした感じがあり、あなたが噂話に敏感なだけだろうと反論したくなったが、噂話に疎いところは自覚があったのでやめておいた。疎いと言うよりも、興味が無いと言った方が正確かもしれないが。

「噂によると、どこかの中学をトップで卒業したらしいですよ」

サラも会話に参加してきた。どうやらクロアが『噂好きではなくクロア』も『噂好きらしい』。

「ふ〜ん、ってことは1年生なのか？」

「そうみたいですな」

サラム完全に肯定しないのは、所詮噂程度の信頼度だからだろう。

「で、その噂が本当なら生徒会に入ってもらおうかと思って」

『その』が指すのは、転入生が来るといふ噂ではなく、転入生が来るのは前提として首席卒業の件である。

「狡猾ですね……」

総司の眩きは幸いなことに誰の耳にも届かなかったようだ。

2話　ゴシップ2

「創設祭を前にして、生徒会の勢力拡大ですか？　できれば人材的な面を考慮して執行委員会にまわしてほしいものですがねえ……」

読書中だった烙燿が爽やかな笑顔で提案してきたが、その裏には黒いオーラが漂っていた。

「で、でも執行委員会には総司君が入ったじゃない！　総司君は6人分の力があると思うけど？」

烙燿の形相　表情には変わりはないが　に流石のクロアもすこしたじろいで反論した。

「では、総司君を六等分しましょうか？」

(……ダメだこの人)

本人は冗談のつもりなのだろう、相変わらずの笑顔だ。だが普段は冗談を言わないということを考えて烙燿の冗談はいまいち冗談に聞こえない。

「まあいいでしょう、獲得に向けて頑張ってください。創設祭で恥ずかしい思いをしないためにもね」

珍しく烙燿が雄弁だ。創設祭のプログラムは一日目は屋台等のお祭り、二日目は立候補式の武術大会であり、武術大会は個人戦・団体戦と組まれている。烙燿の言う「勢力拡大」や「恥ずかしい思い」というのは生徒会と執行部会が団体戦で戦うからであり、その挑発

の為と思われる。

「珍しくお喋りじゃない、烙耀くん」

「僕は普通ですよ。皆さんが普段からお喋り過ぎて僕の声が届かないだけじゃないですか？」

挑発の応酬。流石の烙耀は普段から本を読んであるためか語彙は豊富、言葉もすらすらと出て痛い所をついてくる。

「ふふっ、そういうことにしといてあげる。せいぜい油断しないことね！」

クロアは口喧嘩では勝てないと判断したのだろう、捨て台詞を吐いて書類整理にとりかかった。

「……………」

微妙な沈黙が流れる……

「それにしても、転入生は気になりますね」

敢えて中立を演じぬいた総司の言葉だった。

3話 転入生

次の日、噂通り転入生が来た。しかし噂とは違い転入生は二人いるらしく、一人は1-Aにもう一人はなんと総司達と同じ1-Cに来たのだった。

「紫雲 電はくと申します。よろしくお願いいたします」

そう言った女の子、この前まで中学生だったとは思えないような丁寧なお辞儀。ピンと伸びた背は低く顔も幼さが残っているが黒く長いストレートの髪はまるで人形のようなだった。しかし可愛いというより美しいという言葉がぴったりの美少女に総司とレイは見覚えがあった。

「……………電はくっ!？」

「電ちゃん!？」

先に総司が驚きを露わにしてレイも続く。

「まあ! お兄様にレイ先輩、お久しぶりです」

電が二人に向けて再びお辞儀をした。そして総司はふとあることに気がついた。

「もしかしてもう一人の転入生って……………」

嫌な予感がしつつも間違いであってくれと願いつつ恐る恐る電に聞く。

「ええ、燐も一緒です」

が、その願いも儚く打ち砕かれた。

「……長くなりそうだ、仮にも授業中だから雑談は後にしようか」

溜め息混じりに言うと、

「はい」

と電は返事をして指定された席に着いた。

3話 兄・妹・弟

今は昼休みの食堂。授業合間の休み時間に話そうと思っていると、転入生の珍しさか実技の時間に雹が見せた魔法の実力からか、はたまた雹の美貌のせいか、雹の周りには他の生徒が男女問わず集まっ
ていて話しをできるような状態ではなかった。

雹は一度他の生徒との会話を断って総司のもとに歩み寄ってきたが、転入初日からそんな生意気なことさせることも気が引けたので昼休みに話そうと約束をして戻らせたのだ。

「さて雹、なんでお前と燐が転入してきたんだ？」

「お兄様に会いたかったので……」

疲れた様子で問う総司に雹は少し顔を赤くして答えた。サラとプロウはいろんな面で今日は驚きっぱなしである。例えば、妹と弟がいたことや雹の魔法の実力、そしてなんととっても今の回答に。

「雹ちゃんは相変わらずだね」

レイはケラケラと笑いながら言った。レイと総司は中学の頃から一緒。二年前、総司が中学を転校する時もレイは付いてくるという無茶をやらかした。なので雹や燐の事も知っているのだ。

「それじゃ燐がついてくる意味がないだろ」

総司もレイも雹が来るのは納得できた、何せ雹は昔から総司が魔法を使えなくても「お兄様なら絶対にできます」と応援しずっと慕っ

ていてくれた。ときにはそれがプレッシャーになることもあったが、学校で虐げられてきた事を思い起こせばプレッシャー以上に総司の心の支えになっていたのはレイから見ても理解できる事実だった。

それとは逆に燐は魔法が使えない総司を毛嫌いしていた。昔から必要最低限の事しか話したことはなく、雑談などもつてのほかだった。その燐がなぜ電についてきたか分からないのだ。

「私が他の学校で一番と評されるのが許せないのでは？」

なるほどと理解したのは総司だけのようだった。彼は若干捻くれていた少年と言ったイメージがぴったりなのだ。反抗期だろうか？

「燐はうちの次期当主だから電に目立たれるのが嫌なんだろう、電の方が実は強いが男だから当主になったとか言われても困るしな」

家の事情についてはサラとブロウには話した、魔法・武術の名家であることや家を飛び出したこと、レイもうまく説明して暗い雰囲気にならないように努めたため気まずくはない。

そのため総司の言葉も理解できたのか頷いている。

4話 兄・妹

「それにしてもお兄様、何故魔具を？ それに六つも……」

総司の指にはめてある指輪の魔具を見て聞いてきた。さすが女の子と言ったところだろうか、こういうところにはすぐ気がつくようだ。

「それがな、魔法使えるようになったんだよ、しかも全属性を」

「……よかった、ようやくお兄様の努力が報われたんですね」

数秒言葉が出なかったようだが雷が向かい合ったテーブル越しに総司の手を握って言った。

「何もそんなに……」

突然の事で驚いたが手を握っている雷を、雷の目を見た途端総司は言葉の続きが言えなかった。その原因は、雷の大きな瞳から流れ落ちる大粒の涙だった。雷は冷静な表情の裏に負けず嫌いなどころがあり、二人が幼いころに転んで怪我をしても、組み手で負けても涙を人前で流すことのなかった。それを知っているから「大袈裟だ」などとは絶対に言えなかった。雷が初めて人前で流した涙は、大好きな兄の奇跡に近い成長に対する感動と喜びの涙だったのだ。

「ありがとう、雷」

涙を流す目の前の妹の頭を優しく撫でてなだめる。

「よかった、本当によかった」

まるでこの空間に二人しかいない様な状況だが生憎と同席している同級生が見ている。それどころかどうやら食堂にいるほぼ全員目を引いてしまったらしい。視線が痛い。

「ほら、もう泣きやみなさい」

「はい、すみません、喜びのあまりつい」

雹の謝罪に総司は優しく微笑みかけた。その後、いつもと同じ空気なのは総司と雹だけでレイ達三人はどこからつっこめばいいのやら、そもそもつっこんでいいものか頭を悩ませた。

5話 勧誘

午後の授業を終えて総司とサラはいつも通り生徒会室に向かうのだが、そこにはいつも通りではない人がいた。もちろん電である。彼女は午後の授業が終わるのとはほぼ同時に校内放送で生徒会室に呼ばれたのだ。

「お願い、生徒会に入っ！ 今なら会計が空いてるから！」

電が生徒会室に入った途端にクロアが言った。上級生ということを知っているのだろうか、威厳も何もあつたもんじゃない。

「えつと、しかし……」

さすがに常に冷静を心掛けている電も慌てているようだ。微笑ましい（？）光景だ、などと考えていると、電が総司を見てきた。一瞬何の事だか分からなかったがどうやら生徒会に入るべきか聞いてきているようだ。

無言の質問を理解したうえで電に微笑んだ。すると、電がクロアに向き直って

「分かりました、その話お受けいたします。紫雲 電と申します」

黒く綺麗な髪を揺らしながら頭を下げる電。

クロアがハツとする。どうやら自己紹介を忘れていたようだ。ほんとはこんな人が生徒会長で大丈夫なのだろうか、そんなことを思いながら自己紹介が進んで総司を除く全員が終わった。

「ほら、総司君も自己紹介して！」

クロアが何をぼさつとしているんだと言わんばかりの視線を乗せて総司に言ってきた。

「先輩、なに言ってんですか。なぜ自分の妹にわざわざ自己紹介なんか……」

「……えっ!？」

(なんとということだ、この先輩はこの状況で兄妹だと気付かないなんて……)

総司が本格的にクロアに冷たい視線を送るが口ではつつこむ事は出来ない。一応先輩だ。一応。

「おいクロア、鈍いにもほどがあるんじゃないか？」

苦笑しながら一ノ瀬がすかさずつつこむ。さすが会長と思わざるを得ない。ちなみに総司はクロアの事を会長とは呼ばない、所属は執行委員会なので会長と呼ぶのは一ノ瀬だけと決めたのだ。(委員長でもよかったが、一ノ瀬は委員長と呼ぶにはキャラが違うと総司は思う)

新たに生徒会に一人増えたが、雷が相手だと創設祭の団体戦もなかなか厳しい事になりそうだ。昔からの雷の実力を見ている総司は素直にそう思った。

6話 帰路

雹は生徒会の仕事を教えてもらい、総司はいつも通り見回りや書類整理をして本日の作業は終了。それぞれ帰宅の途についた。

「お兄様、一緒に帰りませんか？」

突然雹がもしもししながら話しかけてきた。総司は別に構わなかったがひとつ問題があった。

「別にいいけど、家と俺の家は逆方向じゃないか？」

家というのは実家、つまり総司が昔住んでいたところである。そこは学校からかなり距離があり、今総司が住んでいるところの真逆に位置する場所だ。

「と云うか、学校まで来るのにかなり時間がかかるだろ？ 家に帰る頃には真っ暗になるんじゃないか？ それなのに生徒会に入っただ丈夫か？」

立て続けに総司の質問が雹に投げかけられる。

「あ、あの、それがその……」

雹が口ごもる。何故だか嫌な予感がする……

「その、転入するにあたりお父様と言い合いになってしまい……」

隣と雹は父の命令で高レベルの高校に入学した、それなのにランク

が普通の学校に転入するというのだ、言い争いになるのは当然だ。

「帰り、たく、ないです……」

だんだん声が小さくなっていき、最後の方はほとんど聞こえなかった。聞こえなかったのにも関わらず電が何を言いたいのか分かってしまった。

「俺のところに泊まりたいってか？ さすがに親父が許さないんじゃないのか？」

念のため形式的な回答をしておく。

「燐に伝言を頼みました、とりあえず大丈夫かと」

控えめな性格の電が 特に総司には 総司の確認もなしにここまで手を打ってあるとは……

「……駄目って言ったら電が泊まるところが無くなるじゃないか、俺にそんなことできないって分かかってやってるだろ？」

総司の台詞は間接的な許可だった、それを理解したのか電は顔を上げて妖艶な笑みを見せる。まだ幼さの残る身体と大人びた笑顔のギャップに総司はドキッとしたが冷静を装う。 ばれていないだろうか？ 総司は二つの意味でドキドキしながら電と帰宅した。

7話 自宅

巨額な資金を父親から渡されたため総司の家は一軒家だ。それなりに大きい家を建てて無駄なことと思いつつも部屋もいくつか用意した。まさかこんな形で役に立つとは……

そんなことを思いつつ、妹と同じ部屋で寝るというアブナイシチュエーションから逃れられたことにほっと一息ついた。　　電は何か言いたそうだったが、気付かないふりをしておいた。

晩御飯は電が用意してくれるらしい、才色兼備の妹が用意してくれるというのだからその言葉に甘えない理由もないだろう。

コンコンとドアがノックされ晩御飯の用意ができた事を告げに来たようだ。一階に降りて椅子に座ると電が料理を運んで向かいの席についた。学校以外で複数人の食事は総司にとって久しぶりだった、加えて久しぶりに会った妹とだと要らぬ緊張をしてしまう。

「……………いただきます」

とりあえず黙っているのも精神的にきついので食べよう。

基本的に総司は和食好きだ。電もそのことは理解しているようだし電自身も和食の方を普段から好んでいる。

電が用意した食事はご飯に焼き魚、味噌汁とごく普通のものだった。しかし、米の柔らかさやつや加減、魚の焼き具合、味噌汁の味付けも何から何まで総司が作るご飯より美味で総司の好みだった。

電は自ら味を聞くなど無粋なことはいらないだろうが感想は聞きたいのだろうか。そんなことを考えて口を開く。

「うん、おいしい」

簡素な言葉だが気持は籠っている、電もそれくらいの事は理解している。二人共笑みを零して食事は進む。

久しぶりの兄妹水入らずの食事に総司と電に心温まる時間が流れる

……

8話 談話

「ところでお兄様、巷で噂になっている事件をご存知ですか？」

雹は食後のお茶を淹れながら聞いてきた。

「事件？ 魔法関係の事件なのか？」

総司が世情に疎いというわけでもないが聞き覚えのない事だった。事件が起これば噂や新聞が配られる。新聞が無い事を考えると雹が言っている事件は緘口令でも布かれているのだろうか。

「そうです、魔法を悪用した魔法師殺人事件なのですが……」

「聞いたことないな、緘口令でも出ているのか？」

総司は予想を立てて雹に聞いてみる。

「はい、しかし噂となって僅かながら広がってしまいました。実はお父様がその事件を担当しているのです」

予想外の雹の台詞に思わず目を見開いてしまった。

「親父が？ 珍しいな、そんなに手強い相手なのか？」

たかが事件程度で紫雲家が動くことはごく稀である。しかも当主が動くなど前代未聞の出来事と言っても過言ではない。

「ええ、この国でも有数の実力者達が殺されたそうで、何やら魔法

を一時的に封じる術を持った敵の様です」

雷は冷静に言った。否、冷静に見えるが内心は焦っているのだろう。それもそのはず、魔法は国の軍事力の中心。それを封じる手段があるとすれば様々な国がその技術を奪い合うことになるだろう。

「なるほど、生け捕りにしたいが普通の軍人やギルドの者では相手にならない、そこで世界でも名高い実力者の親父の出番か」

「まあ俺には関係ない、犯人が捕まるのを待とうぜ」

総司が気楽に言うと雷も縦に頷いた。

「あー、辛気臭くなっちゃたな。雷、お茶御代わり」

笑顔で辛気臭い空気を払い、二人でお茶を飲む。しかし総司の目が笑っていないことに雷は気付かなかった。

9話 夜

総司は基本的に寝るのが早い、床に就くのが早ければ眠りに就くのも早い。そして翌日の朝はすっきり目覚めるというルーチンである。

しかし今日は違った。今は午前三時過ぎ、町は普段の喧騒からは想像できない静けさが辺りを包んでいる。まさに草木も眠る丑三つ時と言ったところか。

その町の大通りに 少年と言うには少し遅く、青年と言うにはまだ少し早いと思わせる 男が歩いていた。

学校指定のブレザーを着用していないので傍から見れば誰だか分からないかも知れないが、総司だ。

(しかし、誰もいないなあ)

心の中で呟き周囲の気配を探る。

(魔法を使えなくする技術、そんなものがあつては戦争が始まる。どの国がそんな技術を持って戦争がはじまり、一方的な殺戮になるだろう)

総司はそんな事態を回避するために犯人を探してその技術を葬るつもりである。総司は戦争を経験したことは無い、だが戦争が始まれば電や燐は戦争に駆り出されることになるだろう。それだけは兄として許せない、なんとしても先手を打たなければ……

加えて実力者が殺されているという事実は総司にとっても嫌な予感を

もたらした。燐に雹は共に紫雲家の次期当主候補として軍事関係者にとつてはある程度有名になっている。狙われる可能性は低くない。

（犯人がわざわざ殺人を犯して技術を晒す意味が分からないけど、とっ捕まえてから聞くか）

そんなことを考えていた矢先に異変は起こった。

（誰かに見られてる…… 後ろからだな）

相手の居所を後ろと特定し意識を後ろに集中したその時！

ドンと何かにぶつかった、人の様な感触だったが周りに人はいなかったはず。恐る恐る顔を上げるとそこにはスーツを着た男が立ち塞がっていた。

10話 対面

(あり得ない！ 後ろに集中したとはいえ人の気配に気づかないはずがない)

一瞬で総司は動揺し後ずさる。

「お前らが噂の殺し屋か？」

冷や汗が流れるが動揺を表に出さないためにも質問する。

「総司、久しぶりだな」

が、暗闇で顔が見えないが短髪黒髪の男の返事は予想外のものだった。

「親父！？」

「こんな時間に何をしている。電は家に置き去りか？」

形式的な質問するのは総司達の父親にして紫雲家現当主である紫雲龍之介りゅうのすけだった。しかし向き合って話をするなど家を出てくる時以来の事で、合計でも片手で足りる程度の回数しかない。

「親父こそこんな時間に何を……」

「仕事だ」

きっぱりと答えるがこんな時間まで仕事をしているのは龍之介にと

つては珍しくも無い事だ。それほどまでに紫雲家の当主と言つものは多忙なのだ。

「噂の殺人事件ですか？」

「電が喋ったのか」

「……うむ、これはちょうどいいかもしれんな」

龍之介が頭を抱え込むようにしてひとしきり悩んだ後、納得したように結論付けた。

「この一件、お前が処理しろ」

11話 戸惑い

「……呆けたんですか？」

そう総司が問うたのも自然と言えよう。総司は既に紫雲家を抜けた者であり、父親と言えどもその命令に従う必要は一切ない。とり方によっては都合のいい事この上ない話である。

「馬鹿を言うな。今、お前の家に雹が居るのだろうか？ 雹の護衛をしつつ犯人を捕まえろ」

「成果によっては家に帰ってきて構わないが……」

最後の台詞は総司にとっても驚きの一言である。だが、冷静になれば気付く事が出来た。龍之介は総司に魔力が現れた事に気が付いている。家に帰ったとしても都合のいいように扱われるだけだろう。しかし、雹がなんと言うだろうか……

「家なんか帰る必要はない」

「……けど、雹が帰れと言うでしょう」

「そうだな、雹はお前が出て行った後も心配してたぞ」

雹が直接龍之介に心配している姿を見せた訳ではないだろう、雹は総司を追い出した龍之介を内心嫌っているのだから。

「妹の期待に応えない訳にはいきません。それに家の話を抜きにしても雹や燐に害が及びそうなので調べている途中でしたし……」

「そうか。ではこの一件はお前に任せた」

「任されたつもりはありません。俺は隣と壱に危害を加えようとしている輩を懲らしめるだけです」

心ばかりの抵抗だが、龍之介には何も響かないと知っている。

「……そうか」

既に他の事を考えているようで、中身の無い返事だった。そう言い終わった瞬間にどこかに消えていた。

「くそっ」

どこか手玉に取られている様な気がして苛立ちを地面にぶつけた。

1話 一日前

翌日の朝は何事も無かったかのように振る舞った。いつもは欠伸が出たりと夜更かしたことがすぐ分かるような態度になってしまいが今日はそうはいかない。昔から隠し事をしてもなぜか雹にはすぐにはばれてしまうのだ、今回はしっかりと誤魔化すつもりだ。

何事もなく朝食をとり雹と通学路を歩き始めて約十分、朝っぱらから問題が発生した。

「燐……」

思わず呟いた総司の視線の先には、総司に似た黒い髪に黒い瞳の男の子が立っていた。

「……よお総司。雹、親父がしばらくそっちに居ていいってさ」

久しぶりに会った弟は相変わらず兄を嫌っていた。簡単すぎる挨拶は総司に目を向けずに放った言葉で会話する気は最初からないようだ。

「そうですね、珍しい事もあるものですね」

雹は表情を変えずに燐を見て言った。

「よくわかんねえけどなんか考えがあるんだろ」

やる気のなさそうな顔で立ち去ろうと後ろを向いたと思ったら振り返って口を開いた。

「……あー、そうそう俺、監査委員会に入ったんだ」

だからどうとも告げずに燐は去って行ったが総司と雹には言いたいことは伝わっている。

「創設祭の二日目で戦うことになるかもしれないね」

雹は静かに呟くと総司は黙って頷いた。

隣からの宣戦布告（？）を受け取って早一日、校内はまさにお祭り騒ぎと言ったところだろうか。いたるところに屋台が並び校舎の屋上には長いポールが立っていて先に校旗がなびいている。創設祭はまさに校内の生徒も教師も総出で取り組んだ一大イベントなのだ。

「平和だな」

総司は特にやることも無いので一日中見回りをしている。と言っても執行部会は総司を含めて四人なので全員が遊びながら見回り中だ。そんな事で非常時に対応できるのかと思われるかもしれないが、四人の実力を知る者ならばそんなことは思わないであろう。

レイはどうやらブロウと見物をしているらしい。もちろん総司やサラも誘われたがサラは生徒会の仕事　トラブルの処理等　があるため断り、総司も見回りがあるので　と言っても遊びながらも可であったが　電に何故か睨まれたので断った。

総司は何故睨まれたのか考えたが、女心に疎い総司に答えが出せるはずもなく見回りを続ける。基本的に今日は暇になりそうだ、トラブルがないという面では平和的でいい事なのだが無為に過ごすのは気が進まなかった。　総司が歩いているだけで抑止力になっていると本人は気付いていないが。

ふと時間が気になったので辺りに目を配るとズイッと腕時計を付けた腕が差し出された。一瞬驚いたが手を出した人の方に目を向けると見回り中の一ノ瀬だった。

「もう昼時だな、飯は食ったか？」

「いいえ、そこらの屋台で買う予定です」

唐突な質問に答えると一ノ瀬はパックに入った焼きそばを総司に渡した。

「ほら、先輩の奢りだ」

人の厚意を無下にするつもりはないので礼を言って二人で近くのベンチに座る。

「……明日の団体戦のルールは知ってるのか？」

一ノ瀬は焼きそばのパックを開けながら聞いてきた。

「参加するのは生徒会と執行部会、部活動代表者会と監査委員会だけで各委員会のトーナメント式で試合は四人の勝ち抜きでしたっけ？」

一般生徒も参加は可能だがこの面子に割り込むなどなかなかできるものではないだろう。

「なんだ知ってるなら来る必要無かったか」

「電に聞きました」

呆れたように言う一ノ瀬に総司はサラッと言うと「……できた妹だ」とだけ答えた。

3 - 15 パンフレット

以下、創設祭パンフレットより抜粋

創設祭二日目は個人戦と団体戦に分けた武術大会を行います。

参加は自由、ただし団体戦は四人で一チームとみなします。

個人戦ルールはトーナメント形式、武器も魔法も使用可。ただし危険な魔法や過剰な攻撃は禁止、危険と判断した場合は四隅に配置された教員が審判として止めに入る。

個人戦は各演習所で行い、準決勝と決勝は実戦室で行われる。どの試合も一般公開しています。

個人戦のトーナメント表は九時半に校舎の出入り口に貼り出され、生徒会役員が縮小したコピーを配布します。試合開始時間は十時を予定しています。

団体戦も同じくトーナメント形式で各チーム四人の勝ち抜き戦で勝ったチームが上位になる。

各チームの選手が戦う順番は試合ごとに変える事が可能。

団体戦の試合はすべて実戦室で行われます。

試合開始時間は午後二時を予定していますが、個人戦の進行度によつては変更の可能性があります。

団体戦のトーナメント表も個人戦と同じく九時半に貼り出され、生徒会役員が縮小コピーを配布します。

一日目は特に問題も無く過ぎた。生徒会は仕事が多かったらしいが、総司達が解決すべき問題 喧嘩などは発生しなかった。

今は問題の二日目、朝九時だ。問題と言ってもそこまで重要でもないのだが、総司にとっては団体戦の組み合わせによっては妹や弟と戦わなければいけないのだ。戦うことに問題があるわけではないが、実力から結果を推測するにお互い無事では済まなさそうだ。

(あと三十分で組み合わせ発表か……)

団体戦に参加するのは生徒会・執行部・部活動代表者会・監査委員会の四チーム。生徒会には電、監査には燐、という事は一試合目に部活動代表と戦って生徒会と監査が潰し合ってくれるのが総司としてはベストである。

「ねえ、総司君は誰と一番戦いたくない？」

本部テントの中で準備をしていた総司にクロアが尋ねる。

「僕ですか？ やっぱり生徒会の皆さんとは戦いたくないですね」

本当は電と戦いたくないが一人を指名するのも気が引けたので当たり障りのない回答をする。

「嘘だあゝ、ホントは電ちゃんと戦いたくないだけでしょ？」

凶星だ。本当にクロアはやめてほしい所で鋭い。

「ほら、トーナメント表あるよ」

そう言っつて一枚の紙を目の前に出してきた。

「何ですか？ 発表にはあと三十分くらいありますよ？」

「配布用を作るための原版よ」

当然の疑問を口にしたが予想をしていたのかサラッと答えるクロア。

原版をじっくり読むと、一回戦は生徒会对監査委員会、執行部会对部活動代表者会だった。普段は信じない神様にこれほど感謝した日は総司の人生で初めての事だった。

個人戦は午前から正午過ぎまで行われた。なかには負けて逆上した生徒が危険な攻撃をするといったトラブルもあったのだが、審判として配置されえた教員が実力行使で止めに入った。こんな問題もまだ予想の範囲内なのでこれといった騒ぎも起きずにはほぼ予定通りにプログラムは進行されていた。

「あと少して団体戦ですね」

「そうだな、じゃあ作戦でも練るか」

一ノ瀬がそう言うのと生徒会がいる本部のテントから出て校舎裏に向けて歩き出した。

校舎裏に向かう途中で劫亮と烙耀と合流した。結局メンバー全員で作戦会議を始める。それにしても校舎裏にしゃがんで屯すだけでも不良っぽいがそのうちの二人は赤い髪に赤い瞳だ、傍から見れば必ず誤解を招くであろう。

「じゃあ始めるか、一回戦目の相手の部活動代表者会は剣術部や魔法研究部の代表が入る会だというのは知っているな？」

一ノ瀬の言葉に他三人が頷く。

「代表が集まる会の代表四人と戦うことになるから気を抜くなよ。と言つてもきつと俺まで出番は回ってこないだろう、一番手は劫亮…… 結果はどっちでもいいが相手に圧倒的な力を見せてやれ」

「了解、まあ負けるわけないだろうけどな」

劫亮は飄々とした口調で答えると一ノ瀬は言葉をつづけた。

「二番手は烙燿だ、分かつてると思うが劫亮が負けなとも限らないからしっかり相手を分析しとけ」

「もちろん」

劫亮が反論する前に烙燿がメガネを上げながら答える。

「そんで三番目は俺だ、一回戦は出番がないと思うが二回戦、つまり決勝は相手が生徒会でも監査でも厳しい戦いになるだろう。どちらかと言えば監査の方が楽だが……」

そうもいかないだろう。と一ノ瀬は小さい声で言った。

「ラストに総司だ、お前が戦うのは俺が負けた相手って事になるから相手強いだろうな」

「なんで新入りの一年が最後なんですかっ!？」

「学年なんて関係ない」

ニヤニヤと言う一ノ瀬に総司は反論したが一蹴された。

いよいよ団体戦一回戦が始まる。総司は珍しく自分が緊張しているのに気がついた、過度の緊張感は判断力の低下などいい結果が出ないと総司は思っている。

(試合への緊張感はずれず、観客に対する緊張感を除く……)

総司は自分にそう言い聞かせて観客席につく。今は生徒会对監査委員会の試合を観戦しようとしているのだ。緊張するには少し早い。

生徒会メンバーは一番手シャーリー、二番手に劉秀、三番手電、四番手にクロア。総司は何故電が三番手なのか疑問に思ったが電の実力と自分が四番手だと思いだすと不思議でもなかった。それは総司などの一部の人が理解できるだけであって、他の観客は何やら騒いでいた。それもそのはずだろう、生徒会に名を連ねる先輩を差し置いて転入生が副将的な立場に立つなど前例が無かった。

監査委員会は名も知らない先輩ばかりが並んでいた。が、一人だけ知っていた。三番手に位置する一年生の男の子、紫雲燐だった。燐が出る事は知っていたので特に驚きはしないが観客は電の時と同じように驚きを露わにした。

試合が始まって十分経っただろうか。生徒会一番手のシャーリーは一勝し監査の二番手に負け、劉秀はあつという間に監査の二番手に

勝った。次は劉秀対燐、劉秀との対戦経験と燐の実力を見た事があ
る総司は接戦になると予想した。

しかし総司の予想は外れた。総司が予想を立てる元になった燐のデ
ータは昔の事であった。もちろん成長している事を考慮したが、そ
れ以上に成長していた。

劉秀を圧倒的に上回る体術とパワー、生まれつき多い魔力を初級魔
法に注ぎ威力を中級魔法なみにした力押しでの戦い方だった。

3 - 19 妹・弟

生徒会三番手は雹、一方監査委員会の三番手は燐。総司としては久しぶりに見る妹と弟の対決に期待と不安を持ち合わせている。あまり向きになって戦うと周りに被害が及ぶのではないかという不安であるが。

向かい合う雹と燐、雹はいつも以上に真剣な顔で燐はいつになく真剣な顔と言ったところか。

「雹、手加減はしないからな」

「必要ありません、お兄様が私を見守っている限り私は負けませんから」

ニヤリと笑いながら挑発する燐に雹はあくまで静かに冷静に答える。結果として燐が声を詰まらせてしまったわけだが……

「始め！」

審判の一言で文字通り会場の空気が変わる。舞台が凍りつき周囲の気温が一気に下がる。上級魔法 絶対零度 は広範囲に効果が現れる魔法でそれは当然雹が放った魔法である。

「いきなりかよ、チッ！」

そう言っただけで燐は自分の身長くらいあるバスターソードに火を纏わせて振りかざし雹に近寄ってくる。燐の魔具は火属性のバスターソード、一方の雹は水属性の指輪だ。燐としては作戦など立てるのは好

きではない、あるとするならば攻めて、攻めて、攻めまくる。と言ったところだろう。近接戦闘の武器を持たない電に対しては剣の攻撃範囲内に入れば勝てるかと踏んでいた。

だが、燐よりも多い魔力を駆使して魔法を放つ電には簡単に近づけなかった。

切りかかってくる燐に氷の壁を出して左右から氷柱で攻撃。前を塞がれ左右からの攻撃に燐は後ろに下がった。その時……

「しまっ」

背後に壁を出された。どうにか抜け出そうと高くジャンプした瞬間燐は絶句した。なんと目の前から氷でできた半透明の龍が燐に喰らいかかっていた。

「くそっ！」

龍に喰われる間に燐の体が赤みがかったオレンジに光った。その直後、龍に啜えられ地面に叩き付けられた。

雹が使った龍の魔法は、上級魔法 氷龍。氷でできた龍を思いのままに動かせる追尾型の魔法である。次々と上級魔法を放った雹は少し息が上がり、焔は動けなくなっていた。焔が最後に使った魔法は上級魔法 火神崇拜。火の神を崇め続け、火属性を極めた者しか使えない技だ。身体能力を大幅に増大するが代償は大きく、体にかかる負担が大きいのだ。発動がもっと早ければ氷龍も回避できたかもしれないが、初級と中級の魔法を主体に戦うという信念が最後に邪魔をしたのだった。

試合の結果としては、雹が焔と四番手を倒し 四番手は焔より実力が無くあっさり倒し 終わった。

「お疲れ」

優しくかけられた声に雹はパツと明るい表情で振り返ると総司が立っていた。

「かなり攻め急いだね、氷龍も焔が火神崇拜を使って防御を固めなかつたら数週間は気絶ものだっただろうけどな」

「相手が焔だから使ったのです。それにちゃんと加減もできます」

頬をぶくつと膨らます雹に総司はいつものクールな表情とのギャッ

ブにドキッとしてしまった。

「それにしてもお兄様は私が氷龍や燐が火神崇拜を使った事には驚かないのですか？」

「雹は絶対零度を使った地点で驚いたけど、昔の雹を見てれば納得の成長だな。燐も劉秀先輩との試合でなんとなく予想はついてたよ」

そう言って笑う総司に雹は呆れたように、でも嬉しそうにほほ笑んだ。

「次はお兄様の番ですね、頑張ってください」

「ありがとうございます、でも会長曰く『出番はない』だってさ」

前も言ったように総司の言う会長とは一ノ瀬の事である。

そうですね。と言って笑う雹の表情の裏には、兄が決勝に上がってしまったら戦わなければいけないという心配だった。

3 - 2 1 一回戦(2)

生徒会对監査委員会の試合が終わって約五分後に執行部会と部活動代表者会が始まった。

戦う順番は事前に行った作戦会議の通り、一番手の劫亮に続いて烙耀、一ノ瀬、総司と言った順番だ。総司は全属性を使えると有名になっているのでほとんどの観客が雹や燐のときの様に騒ぐという事は無かった。しかし一年生が最後の砦として起用される事はやはり珍しい事だった。

「始めっ！」

審判の声が試合の開始を告げる。その間総司達控え選手は舞台の横に設置された椅子に戦う順番で座っている。

劫亮の戦いをじっくり観察しようかと考えていると、一ノ瀬を挟んで烙耀が話しかけてきた。

「弟くんや妹たちより騒がれないね。総司君って人気ないの？」

「違いますよ。いや、人気があるって言いたいわけじゃなく……」

烙耀がニヤニヤしている。なんとなくわかっていた事だが、どうやら性格が悪いというか、腹黒い人なんだろうなあ。と烙耀の評価を修正する。

「あ、劫亮先輩勝ちましたよ」

そんな雑談を繰り返しているうちに劫亮が全部勝ってしまった。そもそも劫亮は純粹な力の勝負なら総司を除く三人では一ノ瀬の次に強いのだ、一ノ瀬としては簡単に負けてしまっただけでは困るのだ。試合的な意味や普段の委員会活動の意味でも。

「おつかれ〜」

烙耀が劫亮を労う。

「まあ当然だな。でも次はこうもいかないからな」

深刻な顔で一ノ瀬が呟く。

（そこまで真剣に戦うのか？）

今さらそんな場違いな質問ができるわけが無く、総司は心の中に留めておいた。

3 - 2 2 心理戦

「お疲れ様」

団体戦決勝は三十分の休憩が挟まれてから行われることになる。生徒会や執行部会の面々はいくら自分たちが団体戦に出場しているからと言って創設祭の段取りやトラブルの対処は怠る事は出来ない。そもそも団体戦は誰も強制されていないのだから当然と言っては当然だが。

「あ、ありがとうございます」

本部にいったん戻った執行部会の四人に飲み物を渡して苦労を労ってくれたのはクロアだった。

「余裕じゃねえか、次は俺らと戦うんだぜ？ それとも睡眠薬でも盛ったか？」

劫亮がニヤニヤと人の悪い笑みを浮かべる。

「はあ？ 馬鹿じゃないの？ そんな事しなくても勝てるわよ！」

「おお！ 言うようになったじゃねえか。達者になったのが口だけじゃないといいな」

「ホントに生意気ね、少なくともあんたには負けないわ」

飛び交う皮肉の応酬、当事者のクロアと劫亮以外は口を出せないでいる。否、その皮肉の応酬をBGMの様に聞き流しているその他の

面々だった。

「なんだと!? なら、決勝は一番手でかかってこい! 俺が一瞬で捻りつぶしてやる」

「望むところね、泣きを見ても知らないから!」

二人の論争が終わったと判断した一ノ瀬が執行部のメンバーを集めて移動した。どうやら会議の様だ。

「よし、よくやった。これであいつが一番手に来れば俺と戦う頃には消耗しているはず」

「おう、俺が実際クローアと戦っても結果は見えてるからな」

どうやらこれも作戦の一つだったようだ。実際に戦った事は少ないらしい、烙耀曰くその時はない頭をフル回転させ奇襲等の攻撃で接戦だったが二度も成功するほど甘い相手ではないだろう。総司は劫亮先輩もたまには頭を使うんだな、と失礼なことを考えていた。しかし

「……」

三十分後、舞台上上がった執行部会のメンバーは劫亮の努力が無駄だったと思わざるを得なかった。

3 - 23 決勝戦(1)

「作戦失敗だったな！」

試合開始の前のメンバー紹介で戦う順番に並んだ執行部会の面々に向かい合ったクロアが勝ち誇った様に言った。言葉から分かるようにクロアは一番手の場所には並ばず三番手として一ノ瀬と向かい合っている。

「思ったより冷静だな」

烙燿がクロアに答える。性格から考えて一番手で来るだろうと予想していたのだ。基本的に烙燿の分析による予想が外れることは珍しく、本人も動揺しているのか額から浮かび上がる汗が赤い髪の隙間から見て取れた。

「ふふ、電ちゃんの申し出よ」

「……」

自慢げに言うクロアに一同は絶句し、烙燿は思わぬ伏兵がいたものだと感じていた。同時にクロアはクロアだったか、と自分の予想も電がいなかったら当たっていたとポジティブに考え直した。

「ともあれ俺たちの作戦は失敗だ、勝率は一気に下がっただろう、気合入れてけよ」

一ノ瀬が敵を目の前に作戦の失敗を告げると、自分を含めて総司達に活を入れた。

司会者（教師）が出場選手全員の名前を読み上げると、会場は様々な声が上がリボルテージも上昇していく。圧倒的に多かったのが電に対する「可愛い」だの「綺麗」などの男女問わずの意見だったが……

「それでは両チームの一番手以外は舞台の外へ」

生徒会はシャーリーを執行部会は劫亮を残し舞台から降りる。会場は静かになったが熱気は収まらない。向かい合った二人の目の真剣さを増す。

「それでは決勝戦、第一試合目……」

3 - 24 決勝戦(2)

「始めっ！」

審判の声と同時にシャーリーが短刀を握りしめ走り出した。走りながら右手に付けた指輪を媒介に風の魔法を発動させる。すると劫亮に向かって走るシャーリーの速度が上がった。

「くそっ！」

予想以上に速いシャーリーの接近する速度に悪態をつき、鎌から縦向きの黒い刃を飛ばす。閻属性の中距離用初級魔法である。

(劫亮は接近されるのがあまり得意じゃないはず……)

兎の様に左右にびよんびよんと避けながらシャーリーは考えた。理由は武器であり媒介の鎌のせいである。相手が剣や槍などは得意な間合いだが、シャーリーの短刀や一ノ瀬の様な拳で戦う極端な近接戦闘は苦手だとシャーリーは踏んだのである。

シャーリーは直線的な攻撃を楽々と回避し、劫亮の鎌の間合いに構わず突入する。

「ふっ」

劫亮が無駄な力を抜いて遠心力を味方に鎌を薙ぐ。シャーリーに向かい黒い一線が迫る。それをしゃがんで回避すると大腿四頭筋をフルに活用し地面を蹴り一足飛びに劫亮に肉薄する。

(もらった！)

心の中で勝利を確信し右手の拳を思いつきり劫亮の顔に向けて突き出す。

『ビヨン』と人の顔に拳が当たった音とは思えない間抜けな音がシャーリーの耳には何故か鮮明に届いた。

「えっ!？」

シャーリーが驚きを口にすると同時に足が何かに掴まれた。目の前にはたった今殴りつけた人形が吹き飛ばずに立っている、その影から真つ黒い手が伸びて足を掴んでいた。力で強引に引き離そうと引っ張るが離れない。

「おい、俺を忘れるなよ」

いつの間にか背後にいた劫亮の鎌がシャーリーの首にそつと当てられて試合は決した。

3 - 25 決勝戦(3)

「勝者、執行部会寿山劫亮」

審判が劫亮の勝利を告げると、観客がざわめき始める。それもそのはず、シャーリーがダミーを殴ってから劫亮の姿はどこにもなかったはずだ。それなのに急にシャーリーの背後に現れて勝負を決めた。その現象が理解できないのはシャーリーも同じようで驚きを隠せないでいた。

「ど、どうやったの？」

「秘密に決まってるんだ。俺は次も戦うんだ、ネタばらしはまた今度な」

そうやって問いかけるシャーリーに笑顔を見せると、納得したのかシャーリーは舞台から降りて代わりに劉秀が出てきた。

「劉秀、悪いがお前もここで出番は終わりだ」

「負けませんよ」

普段からあまり喋らない劉秀がボソツとそう言うと、両手にナックルを付けて構えをとる。それを見て劫亮も黒い鎌を担いで特徴的な切れ目で睨みつける。伝わる緊張感に会場も静かになる。

「始めっ！」

言葉とほぼ同時に劉秀の足元から土でできた角柱を伸ばす。それを

劫亮は紙一重で躲すと、鎌を角柱に向ける。伸びてくる角柱に鎌の刃を添えるだけで角柱は豆腐の様にスパッと切れた。その恐ろしい切れ味に場内が沸く。

（ちっ、やはり接近戦か）

そもそも体術を駆使して戦う劉秀の魔法、加えて土を使った物理的な魔法はあの鎌に切られる。相性の悪さに舌打ちをして走り出す。

ある程度近寄り劫亮の前に壁を作る。拳で壁を壊して目くらましにするか、壁をそのままにして視界を塞ぎ左右のどちらかから攻撃をするか悩んだが、壁を切られる事を考慮して向かって右から攻撃を仕掛ける。

殴りかかるうとした瞬間、壁の向こうにいたのは……

否、誰もいなかったと言う方が正確だが。

シャーリーが敗北する原因となったあの魔法かと思い、とっさに足元を見るも黒い手は無い。またいきなり背後から来るのかと後ろを振り返るも誰もいない。しかし一つ気がつく。

「影が!？」

口にした通り影の形がおかしい。具体的に言うのならば擦曲がって左の壁に影がつかっている。その先には劉秀が作った壁の上に立っている劫亮だった。

「これは決着がついたも同然だろ」

劉秀の後ろに着地した劫亮が軽々しくそう言う。

「何を言って……」

劉秀は続ける事が出来なかった。正確には続けることは出来たのだが、何かに気がついたように言葉を止めた。

「分かったか？ これは閻属性中級魔法の 影繋ぎ だ。舌の動きや瞬きまで精密な制御は出来ないけど動けないだろ？」

そう、劉秀は振り返ろうとした時に体が後ろに向かない事に気がついたのだ。

「最初から使えばよかつたじゃないですか」

「それじゃあ、つまないだろ？」

劫亮がそう言つと、審判が勝者の名を告げた。

劫亮の本音を言つてしまえば、シャーリー戦や今の試合の決定打となつた魔法には発動条件があつたのだ、例えばダミー人形の近くで足を止めなければ影が足を固定する事は不可能だったり、影繋ぎは相手の影の方に行かないと発動できないのだ。運悪くこの試合は劫亮が太陽を背にしていたので、劉秀の背後に回らなければいけないが、
つた。

（敢えて嘘を吐くとして正解だな。次はあいつだ、勝率は低いが喰らいついてやる）

信念に似た光が劫亮の深紅の瞳の輝きを増させた。

3 - 27 決勝戦（5）

「誠は劫亮がクロアに勝てると思う？」

舞台上に立っている劫亮の背中を見ながら烙耀が聞いた。

「正直言ってきたいだらう。魔力にも大きな差があるし、何よりあいつは光の魔法を使うからな」

「だよ、そう考えると俺も勝てなさそうだけど……」

「ああ、だから二番手なんだ。劫亮ができるとここまで戦うからしっかり見とけ」

消極的な二人の話を目を向けずに聞きながら舞台に目をやる。劉秀の代わりに上がってきた生徒会長のクロア、普段から馬鹿にされたりと弄られ役だった彼女が本当にそこまで強いのだろうか？ と、総司は疑問に思った。

「決勝戦第三試合、始めっ！」

審判の声がかかって約一分、劫亮は地面に倒れていた。

「……もう終わりにしましょ？ 結果は見えてるんだから」

試合は圧倒的だった。正しくは状況から見る限り、圧倒的だったと判断せざるを得なかった。

クロアが出した白い表紙の魔導書が突然まばゆい光を放ち会場全体を包み、その後光が消えて周囲の状況を確認できるようになった。観客が見たものは、一歩も動かずに立っているクロアと地面に倒れ伏せている劫亮の姿だった。

衝撃的な結末だったがそれ以上に驚いたものは、今まで圧倒的な強さを見せていた劫亮が何もできなかった事だった。

「ら、焔燿先輩、大丈夫なんですか？」

「うーん、勝ちは無いかな。せめて兄さんよりは粘りたいけど……」

予想以上の實力を見せたクロアにごくりと喉を鳴らして質問する総司に焔燿は苦笑いを浮かべながら答える。

「さて、いつてくるか」

医務室に運ばれる兄を見ながら焔燿は死地に赴く戦士の様に覚悟を決めた顔つきで立ちあがった。

「覚悟は出来てる？」

「女性に手を挙げる覚悟なら」

「まあ、その手がとどく事はないと思うけどね」

お互いが張り付けたような笑みを見せる。

「始め！」

審判の声と同時に劫亮を倒した魔法が発動し、辺りがまばゆい光に包まれる。しかしほぼ一瞬で光が消え、観客が舞台を確認できるよ

うになった時に一同は揃って驚愕した。

その理由は烙燿が劫亮と同じように倒れていた。

と言っわけではなく、クロアと烙燿の立ち位置が入れ替わっていた。

「もしかして、どんな魔法が分かつちゃった？」

若干引きつった笑顔で烙燿に尋ねる。

「一回見せた魔法は通用しないですよ、生徒会長っ」

クイツと上げたメガネの奥の目は、楽しそうな 見方によっては
邪悪な 笑みを見せていた。

「あゝあ、誠まではこれでいきたかったんだけどなあ」

クロアが放った魔法は 白世界 と言うオリジナル魔法で、対闇属性の為に編み出した技である。圧倒的な魔力で辺り一帯を包み込み闇の魔法を使えなくするのだ。防御の面では闇属性にしか効果がないかもれないが、攻撃面では汎用性が高く光に包まれた世界は光属性の技が襲いかかってきても認識しにくいのだ。ましてや相手が闇属性の場合は闇の壁を作って防ぐ事は出来ない。

そして、その技の効果が一番顕著に現れるのが劫亮と烙耀だった。なぜなら、二人の武器である黒い刃の鎌は闇属性により作られたもので、流し込む魔力によって切れ味を自在に変化させられるという代物なのだ。武器を封じられ、魔法も使えない状況なら劫亮がすぐに敗れたのも分かる。

烙耀が行った行動はシンプルで、自分の影に潜り込みクロアの影から出ただけだった。背後から気配を感じ取ったクロアは回避したのだ。

「残念でしたね。ついでに察するに、対処法が知られた今ではあの魔法はもう使うつもりが無いのでは？ 魔力の消費も激しいでしょうに」

相変わらずの作りものの笑顔で淡々と語る。

「……………」

少しでも迂闊なことを口走れば烙耀は絶対に逃さず、自分が追い込まれるだけだと判断し黙りこむ。

しかし、それすら利用されることになる。

「会長は劫亮の試合を見ましたか？」

「えっ？」

突然の話題の転換に言葉が詰まった。ちなみに烙耀はクロアを会長と呼び、一ノ瀬のことは誠と呼ぶ。

「自由自在に闇魔法を操っていた様に見える兄さんも発動の条件を満たすために試行錯誤したんですよ」

いかに自然に条件がばれずに発動できるかを毎日のように考えていた兄を思い出し顔が綻ぶ。

「例えば、劉秀君を仕留めた 影繋ぎ。あれは相手の影を自分の向きに……つまり影の頭が術者の方に向かないと発動できないんですよ……」

兄を思い出した時の笑顔とは別の怪しい笑みを浮かべて言葉を続ける。

「……今みたいに」

「くっ！」

クロアの足元から伸びている影は真っ直ぐに烙耀の足元へと繋がっていた。

「無理ですよ、影繋ぎが発動している以上は体は動きません。大人しく降参したらどうですか？」

無理に動こうと力を入れているクロアを見て烙耀はメガネのブリッジを中指でクイツと上げながらつらつらと告げる。しかし烙耀はこの程度ではクロアは降参することは無いと思っている。その予想は当たっていて……

「まだまだ、闇の魔法は光に消されるのよ？」

ニヤリと笑うと辺りが一瞬だけ光る、烙耀は接近してくるかと思えたが衝撃はどこからも来なかった。ただ光る前と後で変わった事は一つだけ、クロアを繋ぎ止めていた影が光によって消えていた。

使った魔法は簡単な光属性魔法 フラッシュ。光属性を操る者にとっては基礎であり、戦闘中の目眩ましはもちろんのこと、薄暗い洞窟などに入った時も光源として利用できる。光を維持するにはそれなりの魔力を消費するが、手のひらサイズの光源程度なら小一時間は誰でも維持が可能である。

「うーん、やっぱり影だけじゃ勝てないか……」

今まで劫亮や烙耀が使っていた影を操る魔法は闇属性魔法の一種の応用であり、試合という相手を殺さない様に配慮が必要な舞台では勝手が良かった。

「よし、どんどんいくぞ」

烙耀がそう呟くと、クロアの足元に黒い靄が発生した。闇属性魔法 闇霧散 だ。好きな所に黒い霧を発生させ、それが包み終わり晴れる頃には対象が霧散したかのように消えている。つまりは人を簡単に消せる技であり、闇属性の魔法とは『消す』系統が他の属性に比べて圧倒的に多いのだ。

あまりの危険な技に四隅にいる審判がガタつと立ち上がり止めに入るうとしたのだが遅かった。その結果はクロアが消えるという最悪の形ではなく、魔法の対象にされていたクロアが光を放ち呪いを被うかのように闇を払ったのだ。

「これもダメか……」

諦めにも似た苦笑いが烙耀の顔に浮かんだ。

3 - 3 1 決勝戦（9）

それからの試合展開は圧倒的と言ったところだった。烙燿が一方的に魔法と鎌による近接戦闘を仕掛けるも、魔法は光に掻き消され、鎌の刃もクロアに切りかかる寸前で消された。

「会長、このままじゃ烙燿先輩は……」

おそらく一ノ瀬も分かっているだろうと総司は思いつつも話しかけた。

「そうだな、ここまで手も足も出ないとは……」

「……まあ、そもそも六属性の中で魔力の差が大きく左右するのが光と闇だからな。もしも烙燿がクロアよりも魔力が多いなら光を飲み込んで烙燿が押しているだろうが、クロアは魔具に魔導書を選ぶくらい魔法を中心に戦うタイプ。つまり、他人より魔力が圧倒的に多いってことだな」

一ノ瀬は試合から目を逸らさずに答えた。ちなみに、相対する属性の中で一番魔力の差が関わらないのが土と風である。生成する土の高度が高ければ風に押される事は無く、逆に風の威力が強ければすぐに土は風化してしまう。つまり魔力の量等よりも技などで決まるので、隙を狙えば魔力が少ない人でも勝てるチャンスはあるわけだが……

「なんで攻撃してこないんですか？」

半ばやけくその連続攻撃を仕掛けたせいか、息を切らし流れる汗を拭いながら烙耀はクロアに聞いた。しかしその質問の答えを聞くつもりは烙耀には無く、息を整えて隙を窺うために時間を稼いだけである。

が、知ってか知らずかクロアは飄々と答えた。

「だって烙耀君の攻撃は絶対に当たらないもん、さっきの攻撃で魔力も体力も消費したんでしょ？　そうやって自滅してくれれば万全の状態で誠に挑めるからね」

(……ばれてるか)

クロアはニコツと笑って答えた。普段の様に可愛げのある笑顔なのは間違いないが、台詞がえげつない。

(せめて魔力を消費させるか一撃は加えてやる！)

3 - 3 2 決勝戦（10）

試合が始まって早三十分、相も変わらず凄まじい攻防が繰り広げられていた。攻防と言えども攻は烙燿、防はクロアだったが。

しかし烙燿の攻撃の手が緩んでいる事は実力がない者でも見ればすぐに気づくだろう。

（くそっ！ そろそろ限界だぞ……）

「降参しないの？」

烙燿の心の中を読み取ったかのようにタイミング良くクロアが戦闘態勢を解くかのように右足に重心を寄せ、左手を腰に当てて話しかけてきた。クロアはほとんど攻撃せずに烙燿の攻撃を防いでいるだけだったので烙燿も一休みと言った感じで警戒を緩めた。

「すると思えますか？」

「……」

汗を流しながらニコリと答える烙燿に対して僅かな沈黙。

「そっか、案外根性あるんだね」

とり方によつては失礼な台詞だが何故か烙燿は嬉しかった。格上の相手に認めてもらえたと感じたのか、烙燿自身ではハッキリと理解できない感情だった。が同時に悟った、次のやり取りでおそらく最後になるだろうと。今のやり取りから、そして自分に残された体力

と魔力を総合しても次の攻撃で底を尽きるだろう。

(よし！ いくぞ！)

（行くと決めたからには玉砕覚悟で攻める！）

そう考えて烙耀の手前の地面から、正確に言えば地面にある影から左右にクロアに向かって黒い槍を伸ばす。風を割く音もせずクロアの左右の側面に向かってカーブを描き迫るが、クロアが両腕を広げたくらいの範囲に入ると見えない壁にぶつかり槍は霧散した。それを機に左に鎌を構えた烙耀はクロアに向かい肉薄する。

中間地点でなけなしの魔力を絞り出して自分に中級魔法 不可視の闇 を発動。すると同時に黒い膜が烙耀の体をコーティングする。今の魔力では長時間は使用できないが、クロアに近づくまではこの魔法のお蔭で姿を消して足音も聞こえないだろう。そしてクロアの後ろにある影からダミーを出す。

「また背後から？ もう打つ手がないの？」

クロアはニヤリと笑い振り向き様に裏拳を繰り出す。が当たったのはダミー人形だった。ふとシャーリーと劫亮の試合で決め手となった技が頭に浮かんで足元を見るが黒い手は無かった。理由は単純明快、烙耀には魔力が残されていないかった。だがクロアにそんな事を考えている余裕はなかった。

（くそ！ 限界だ）

クロアが後ろを向いた瞬間にそう判断するとスツと 不可視の闇が効果を失い、姿が現れ足音が響く。

「なっ！」

クロアから見れば突然目の前に焔耀が現れたのだから驚くのも当然だ。そこに漬け込むかのように焔耀は左に構えた鎌をクロアの胴体に向けて横に薙ぐ。

しかし圧倒的な魔力を使った光で鎌の切れ味が失われると言う事を焔耀は理解していた。否、これまでのやり取りで理解せざるを得なかった。

故に焔耀は思い切って振りぬく鎌をスルツと手から離れた。勢いを失った鎌は光の壁にぶつかりカランと音を立てて地面に落ちた。左から振りぬく勢いを利用して上半身を右に捻ると無理な動きに体がミシミシと鳴る。

「これならどうだああああ！！！！！」

握られた右の拳はばねの様にしなやかな筋肉を使いクロアの顔面に目掛けて思いつきり放たれた。

3 - 3 4 決勝戦（12）

烙燿自身ですら予想以上の勢いで放たれた拳は華奢なクロアの体を楽々と殴り飛ばした。

目の前で起きた現実を未だ認識できない、信じられないといった表情でシャーリーと劉秀は倒れているクロアを見つめる。それも仕方のない事かも知れない、自分達が尊敬とともに慕ってきた人が殴られた。戦闘中ならばその程度は当然だがクロアの実力を考慮すると意外だった。

授業で行われた模擬戦闘などでもクロアを地面につけた者は誰一人としていなかった。それを知らない観客たちも今までのやり取りからこの結果が予想できただろうか。

「よしっ！ やった……」

ズキズキと痛む拳をグツと握り締めて笑みを浮かべる。同時に烙燿が膝から崩れ落ちた、辛うじて手をつき四つん這いの状態になる。すると場内がざわめき始めた。それは倒れた烙燿に対するものではなく……

「いったく、武器を捨てるなんて性格に似合わず無謀な事をするのね。って言うか、女の子の顔を殴るなんて……」

「せめてボディーでしょ」とでも言いたげな顔で頬を摩る。四つん這いになっているせいか、自分より背の低いクロアが圧倒的に大きく見える。おそらく体勢の所為だけではなさそうだが。

「ははっ、試合前に手を挙げる覚悟はあると言っただけでしょう」

これで立つなら勝てないと言わんばかりに苦笑いを浮かべながら烙耀は答える。

「確かにね。それにしても魔力も体力も限界近くでよかった。下手したらあたしは気を失ってたかもね」

「あゝあ、負けたか……でも次は誠だから、気をつけた方がいいですよ」

そう言った烙耀はバタツと支えを失って地面に伏した。とつくに限界だったのだらう、だがその顔には悔しそうな表情は無く、試合前にクロアに言われた『手がとどく事は無い』と言う発言をひっくり返したからか清々しい顔だった。

「分かってるわよ……」そう呟いて振り返ったクロアの視線の先には、二年の時から校内最強として君臨し続けた王者が腕を組み鋭い眼光でこちらを見ていた。

3 - 3 5 後半戦(1)

「さて、じゃあ俺もいつてくる。勝負に絶対なんてことは無いからしつかりクロアの動きを見ておけよ」

「はい、頑張ってくださいね」

真剣な顔で話しかけてきた一ノ瀬に総司は当たり障りのない返事を返す。しかし総司も理解していた、一ノ瀬達三年がこの試合にかける思いは真剣そのものだと言う事を。それは今後の進路に関するお偉いさんが観に来ているからか、一ノ瀬達はただ負けたくないだけなのか。ただ生徒会や執行部会の面々は学生最後の記念として今までお互いを高め合ってきた好敵手と戦う事を楽しそうにしているように見えた。

トントンと音を立てながら一ノ瀬が舞台に向かってくる。それを正面から見ていたクロアは体の底から震えを感じた。それは舞台に立っている為の緊張や強敵との戦闘を心待ちしていた故の武者震いなどではない。一ノ瀬との対戦成績は一勝一敗、魔法の使用を許可された試合で苦戦しつつも何とか勝利を収め、攻撃性の魔法の使用を禁止された試合で大敗を喫した為に一ノ瀬との決着を心待ちにしたのは事実だが。その体内を直接触って揺さぶられたかのように沸き起こる震えの理由はただ一つ。純粹な恐怖からだった。

クロアは優秀だ。故に相手の力量も判断できるつもりだし自分の事を客観的に見てどんな感情を抱いているかなど理解できている。そ

れが祟ったか、無意識のうちに恐怖を感じている事に気がついてしまった。自分が恐怖し戦慄を覚えている事に更に恐怖を感じる。これでは負のスパイラルだ。

だがクロアは恐怖に対抗できる術を持っている。恐れる事は悪い事ではない、その恐怖に対して立ち向かわない事が悪いのだとクロアは考える。つまりは『勇氣』。目の前に圧倒的な力をもつ者が現れようとも決して抗うことを諦めない、そうすることで人は成長するのだ。

今、目の前にゆっくりと自分にとって最大の恐怖、乗り越えたい壁とも言える好敵手が背後から目にも見えない何かをドツと流しながら一歩ずつ近づいてくる。例えるならそう、『殺意』に近いものを感じる。最早、好敵手などとは思えない。絶対的な敵。

いつの間にか震えは止まり、残ったのは震えの代わりと言わんばかりに沸き起こる闘争心だった。

瞳に輝きが戻る。その瞳の先には得意な魔法戦でも楽勝を許してもらえない強敵が立ちふさがる。

3 - 36 後半戦(2)

一ノ瀬がゆっくりと歩きクロアの前で立ち止まった。一ノ瀬もクロアも同じように真剣な面持ちで向き合う。会場内が一斉に静まり返った、まるで世界の中心がそこになったかのような二人だけの空間を演出する。

「やっと決着がつけられるわね」

「そうだな、負けた事が圧倒的に少ないお前にとっては屈辱だったか？」

「それは誠だつて同じじゃないの？ それに屈辱より強敵に出会えた喜びの方が大きかったかも」

静寂を破りクロアと一ノ瀬が話し始める。会場に二人の会話以外の音は聞こえず観客の自然と耳を傾ける。

「確かに、俺もそうだったよ。だから強くなれたんだ、感謝してる……」

「ふんつ、柄にもない事言っちゃって。やっぱり事実上の頂上決戦かしら？」

クロアは今、自分たちが学校内のでっぺんに一番近いと思っていた。それは傲慢などではなく事実だと聞いている会場内の全員が疑わなかった。しかし、目の前の男は否定した。

「いいや、まだ世界には上には上がいる。この学校にも上がいたみ

「ただ」

そこでクロアは一ノ瀬が何を言いたいのか理解できた。ちょうど彼の後ろ、椅子に座っている大切な後輩の一人が見えた。

「なるほど、確かにそうみたいね。なら私達はやる事やって引退しますか」

「引退なんて年寄りくさい事を言うなよ、次の舞台へのステップアップとでも言おうか」

「……」

再び静寂が訪れる。途端、目に見えない風が舞台の中心から会場を包む。否、風と呼ぶには少し違う、風のような感じ思わず顔をの前に翳してしまうような何かが会場を包んだ。

例えるなら、殺気。しかし殺気のような邪悪なものは何も感じず、むしろ清々しく神々しい何かだった。

「やっ……」

「……行くぞー!」

二人の掛け声と同時に試合は始まった。だが二人は動かず睨みあっている。

クロアは右手にレイピアを作りだす。それは劫亮や烙耀の様に魔力で作りだした武器である。ただ、劫亮達は刃の部分だけ魔力で作った物なので持ち手の部分は強化などができない。しかしクロアが作ったレイピアは全体が魔力で作った物なので折れる心配などがない。

と言うか、光属性の魔力から作ったのでクロアの意思一つで右手に持っていたのを左手に移す事や実体を消す事なども可能だ。例え折れても魔力がある限り複製可能である。

そしてクロアは知っている、自分が得意な魔法だけでは目の前に立つ強敵を倒せない。故にプライドは捨てて武器を使うことにした。しかし一ノ瀬には付け焼刃の剣術など通用しない事も同時に知っていた、だから密かに練習を積んだのである。

(レイピア!? いつの間に使えるようになったんだ?)

それを見て一ノ瀬は僅かに焦燥に駆られたが直ちに思考を切り替えて左手に丸型の盾を作りだした。この盾も魔力から作りだしたもので、攻撃を受け止める事より受け流す事を目的としたために盾に無駄な装飾や凹凸は無く、一見シンプルで多少物足りなさを感じる外見である。が、その性能は一对一の戦いで遺憾なく発揮することとなる。一对多数の場合は非常時に備えて様々な攻撃を受け止められ、尚且つ多数の飛道具からの攻撃を考慮し大きいものをチョイスするのが相場かもしれないが今回は一对一、相手一人に注意を払えばいいのだから絶対的な防御は必要なく機動性を重視したのだ。

そして一番のポイントは盾の裏側にある。裏には盾を固定するため腕を通し固定する留め具と手の平で握り固定する二段構えで手から離れることはほぼあり得ない。だが最初に腕を通す一個目の輪、つまり腕で固定する留め具は盾と腕を一体化させるだけの物ではない。盾本体と留め具の間で回転するような仕組みになっており、回避しにくい剣での突きは手の平で握る固定具を離し身を捻れば盾は回転し何の負荷も無く完璧に受け流せる仕組みになっている。素手での戦いを得意とする一ノ瀬が考えた身を守る手段の一つである。

一ノ瀬が盾を嵌めたのを確認したクロアは試しにと言わんばかりに光の矢を三つ飛ばしてきた。それを無言で見つめる一ノ瀬。観客はこのまま呆気なく一ノ瀬に光の矢が当たり、決着がつくと思ってしまうくらい一ノ瀬は何もアクションを起こさなかった。本当に当たる！ クロアでさえそう思った時、一ノ瀬は目の前に厚さ五センチ、高さ三メートル程の壁を一瞬で作り上げた。一瞬でここまで大きく厚みのある壁を生み出したことで観客の誰もが一ノ瀬の実力を認め、観客の視線は一斉に一ノ瀬に向けられると共に会場内の空気も一ノ瀬が占領したも同然だった。

しかし一ノ瀬のした事はそれだけではなかった。光の矢が刺さった壁は只の壁ではなかったのだ。

突如あたしの視界に広がったのは真っ白な光だった。その光の発光源はもちろんあたしではない。そもそもこの光があたしが出したものでならこんな思考は行われるはずが無いのだから。

眩しすぎる光で視力を奪われた直後にあたしを襲ってきたのはこの世のものとは思えない轟音だった。それと同時に凄まじい爆風が訪れる。

やっと状況が理解できた、爆発だ。この程度はまだ初級の魔法に分類され、どの属性でも使用可能な魔法だが身を守るはずの壁が爆発するなど身の危険にしかならないので誰も使わないと思っていた。事実、この魔法を使った人など見た事が無かった。

視力はまだ回復しない、耳もまだキーンと耳鳴りが続くので聴覚も使いものにならない。しかし思考は思ったよりしっかり働いている。

これからどう体勢を立て直すか考えなきゃ！ そう考えた時左から頭に強い衝撃が走った。

一応成功したのか？

クロアからの追撃が来ないため成功したのだと判断しよう。爆発する瞬間に新しい壁を作りだしたのは正解だった様だ。流石に自分の技で致命傷を負うなど馬鹿な真似はしたくない、始めてやってみたが案外うまくいったみたいだな。でも音は防げない、耳鳴りが消え

ないな。

不意に接近するのは相手の実力から考えれば危険なので魔法で戦おう。まずは角柱を左の側頭部目掛けて伸ばす。

ゴツと鈍い音を立ててクロアが地面に転がる。一ノ瀬は追撃と言わんばかりに足元から真っ直ぐクロアの腹を目掛け角柱の攻撃。

ドスツとまた嫌な音が鳴る、そう思った一ノ瀬だったが全く予想してない音が聞こえた。

ガキイイーン!

会場内に鉄と鉄がぶつかり合ったような音が鳴り響いた。もちろん鉄がぶつかった訳ではなく、片方は一ノ瀬が放った角柱だ。角柱が何にぶつかったのかと先端を見ると、注視しなければ気付かないと思われるほどの淡い光がクロアの周囲を取り囲んでいた。

視覚と聴覚を一時的に封じられてしまった今、クロアの身を守る手段とは全身を覆う盾を作る事だ。しかし戦闘において常に最善の策を考え続ける狡猾とも言えるクロアの光の盾は守るだけではなかった。

(さて、ここからどうやって攻めようか……)

全身を取り囲むような光の盾は攻撃を入れる隙間など存在しない。ならば力技で破るといふ手も考えたが、長時間にわたる広範囲の魔法 白世界 や目の前の全身を囲う 光の盾 など は途轍もなく魔力を消費するものだ、しかしそれを躊躇いも無く使うバカ(クロア)の魔力の総量を考えると盾に籠められた魔力は相当な量になるだろう。現に角柱の当たった音が盾に籠められた魔力 つまり強度 を証明していた。

そんな事をほぼ一瞬で考えていた一ノ瀬の目にある変化が映った。

それは相当な強度だと踏んでいた光の盾がグニヤリと歪んだと思えば、光の蛇の様なものが蔦の様に盾にぶつかっていた角柱に巻きつき這う様に一ノ瀬に迫ってきた。

「なっ！」

本来ならば声を出す前に体を動かせと鍛えてきたはずの体が反射的に声をあげる。しかし対処は忘れない。軽いステップで一歩後ろに飛び、今までいた場所に十センチ程の土の壁をつくる。

壁のせいで迫りくる光の槍は見えないがこれで防げただろう。咄嗟の出来事をうまく対処できたためか僅かな溜め息が漏れる。

その瞬間！ ドンと音が会場内に響いた。光の槍による攻撃を防いだかと思った途端、目の前で土の壁は砕かれ、大小様々な破片が一ノ瀬を襲ってきた。

次の瞬間、ゴツつとぶつかった音がした。それは大きな破片が地面に落ちた音などではなく、もっと鈍く音だけで顔をしかめてしまうほどの痛々しい音。

その音の正体は大きな破片が一ノ瀬の頭に直撃した音だった。その事実を確認できたのは観ている観客だけの様だ。クロアは視聴覚を奪われているので攻撃した事までは自分の意志だが、一ノ瀬がどのような対応をとってどう反撃してくるのか分からず未だ構えている。

目の前で壁を壊された一ノ瀬は何が起きたのか理解できないまま衝撃を受け地面に倒れる。同時に地面に落ちた壁の欠片には、赤黒い血がついていた。

「……ん、やっと見えるようになってきた」

やっと視力が回復してきた時にクロアが見たものは、額から血を流しながらゆっくりと起き上がる一ノ瀬の姿だった。

「あれ？　なんでそんな事になってるの？」

「うるせ、そもそも一つ一つの魔法の威力が高すぎるんだよ」

一ノ瀬の曖昧な返答にクロアは頭上にクエスチョンマークを浮かべながら首を傾げる。

「とりあえず仕切り直しね」

「ああ、行くぞ！」

一ノ瀬の目の前の土から角柱が二本、クロアの左右に向かってカーブしながら迫る。それをクロアは左右に二つの壁を作り上げガードする。数分前と同じように壁にぶつかつた角柱を伝い光の蛇が這つて一ノ瀬の元を目掛ける。

(あれを壁で防ぐのは二の舞になるか？)

そう判断すると右足のつま先で地面を叩く。トンと小さい音を立てたと思うと靴の裏の土が角柱になりものすごい速度で突出する。その角柱の勢いで一ノ瀬は後ろに飛びはるか後方に着地した。

その時一ノ瀬は見た、最初に出した角柱を這ってきた蛇は根元の地面にぶつかり土を抉ると思っていたが、後方に飛ぶためにカタパルトの様に利用した角柱に絡みついて爆発を起こした。

（なるほど、あの魔法はオリジナルか。でも仕組みは理解できた！）

どうやら光の蛇は魔法で作られたものを追跡するのだろう。足元から角柱を伸ばし攻撃をするという土属性のスタンダードな戦闘方法を利用したのだ。そして魔法で作られたものの最終地点まで行くと爆発を起こす。

角柱に乗ったまま蛇を回避していたらおそらく爆発に巻き込まれただろう。そう考えると背筋がゾツとした。

しかしネタが分かっただけじゃダメな攻撃を食らう事もないだろう。そう考え戦闘方法も特殊なものに切り替えることにした。

3 - 4 1 後半戦(7)

その後の戦闘は互いに譲らない拮抗した試合だった。

一方の一ノ瀬は王者の貫禄を見せつけるかのように魔法と格闘を巧みに使い分け、大きな一撃を与えることは無くとも確実にクロアの魔力と体力、そして何より精神力を確実に削っていた。

一方のクロアは力強い一ノ瀬の攻撃を華麗に受け流しダメージを軽減している。その精密にコントロールされた数々の魔法は舞いの如く美しく、強力な攻撃にも負けない力強さも持ち合わせていた。

しかし拮抗はいずれ崩れるものであり、それはいつ起こるのか誰も知る事は出来ない。二人の激しくも美しい試合に目を奪われている観客には当然の事だった。だが、試合をしている校内最強クラスの二人には拳を交える度にこの試合の結末を予期していた。

(クロアのやつ…… 魔力が低下してきているな。威力と密度が悪くなっている)

一ノ瀬はクロアのオリジナル魔法である 白銀の雨 と言う、大量の天から降り注ぐ光の矢を土のドームを作って防いだ時に感じ取った情報から分析した。

全ての矢を防ぎきった一ノ瀬はクロアの少なくなった魔力を完全に消費させる戦法に切り替え、囿の魔法を大量に放つ。囿と言っても威力は凶悪なもので、全方位からの角柱攻撃や地割れなど防ぐには

多くの魔力を使わせる攻撃を放つ。

格闘を組み込んだ戦闘スタイルの為、魔力はそこそこ残っている。

(誠が魔法中心の攻撃になった!? さては体力に余裕が無いな)

そう判断し、接近戦で決めようとオリジナル魔法 光速 を発動させる。これは相手にダメージを与える魔法ではなく、対象者の移動速度を光の様な速さにする補助魔法である。ちなみに魔力により倍率が上がるので光の速さで動ける訳ではない。

地面を蹴る音も無く一ノ瀬の左に移動し

(レイピアの貫通力、硬度を強化。……もらった!)

右手に持ったレイピアが更に鈍く光ると同時に渾身の突きが閃いた。

3 - 4 2 後半戦 (8)

クロアが 光速 を使って接近してくる。この魔法は以前に見た事があった為、その速さに驚きは少なかった。むしろ魔力が少なくなってきたという予想が当たっているのなら、格闘戦に持つてくるだろうと判断していた。結果、クロアは見事に接近してきた。

ここまでは完璧に計算通りの動きだ。しかし、嬉しい誤算があった。クロアは俺が思っている以上に魔力を消費しているらしく、光速 を使っているのにも関わらず速度が目視できないほどの速さではなかった。

(左 !)

人間かと疑ってしまう程の速度で近づいてきたクロアにカウンターをしようと構えた瞬間に気がついた。

(しまった ! 左手には盾が…… !)

普段から両手は素手で戦っていたのが裏目に出たか、目視できるクロアの速度に集中しすぎたのか判断を誤った。盾での打撃も考えたがここで盾を振り回すと懐がから空きになってしまう。

咄嗟に右ストレートに切り替えるか考えて腰を捻った所で諦めた。なぜならクロアは腰を捻った程度ではギリギリ届かない位置でレイピアを構えていたのだ。ギリギリのラインで間合いの外に居るクロアに対して関心と恐怖を覚えた。

正直この時、一ノ瀬は手詰まりだった。右のカウンターの為に腰を

捻っていたのだ。足を動かしていれば楽な体制で防御が出来たかもしれないなかったが、クロアの速さでは軸足を移動している余裕などなかった。受け流すために軽い木で作られた盾では貫通するのは必至だろう。

ここまで 盾で「受け流す」ではなく、「受け止める」事になるまで 追いつめられるとは考えていなかった。クロアは確かに強い、それは生まれ持った魔力と魔導書を駆使出来るほどの発想力だけだと思っていた。格闘だって中の上か上の下程度だった。それがいつの間に相手の嫌な方に攻め入り、攻撃がギリギリ届かない間合いを見分けられるような実力を身につけたのだろうか。

考えている場合ではないと脳が警告音を響かせる。しかし体が動かない、考える事をやめられない。

腰を捻っていなければ。

盾で殴っていれば。

軸足を動かしていれば。

近寄らせる暇を与えなければ。

近寄らせる暇を与えなければ？ 何を考えているんだ、格闘なら勝率が上がるはずでは？ 慢心したのか？

そもそも 光速 の速度は実は惑わせるために遅くしたのでは？
なら今までの予想はなんだったのだ？

思考迷路に陥る。

クロアのレイピアが一ノ瀬を貫いた。

左手につけた盾と一緒に一ノ瀬の横腹に突き刺さる。それは只のレイピアではなく、魔法により強化されたレイピアだ。体を襲う衝撃が普通ではない。

スツとレイピアが抜かれるのと同時に血がじわじわと服に染みわたっていく。血と同じように何かが流れ出ていく。力が生命力か、それとも他の何かか。しかし何故か冷静になれた。体中を支配していた熱が下がっていく。それは危険な事だが、同時に頭の熱も冷めていく。

ピーーっつと笛の音が聞こえる。何だ？ と思った後すぐに答えがわかった。

（審判か）

忘れてはいけない、これは学校内で開催される大会だ。致命傷となり得る攻撃を受けた場合は一時的に試合を中断し続行可能かの判断、その判断により強制的に試合を終わらせる権限を持っている。

（ここで試合を邪魔される訳にはいかない……）

「一ノ瀬くん、試合は続行できそうかね？」

四隅から駆け寄ってきた審判役の教師が尋ねる。激痛に内心顔を歪めながら立ち上がり答える。もちろん返事など決まっている。

「大丈夫です」

きっぱりと意志の宿った目で答えると、

「そうか、無理するなよ。引き際を知るのも勉強なのだから」

そう告げて元の位置に戻った。

クロアは少し離れこちらを見ている。隙は無い。大丈夫だ、隙は作ればいいのだから。

(まだ勝機はある、負けるわけにはいかない)

そう決意を新たにした一ノ瀬はある魔法を発動する。

一ノ瀬の隣の地面がボコボコと唸りをあげて盛り上がる。数秒経つと一ノ瀬の左右に一ノ瀬がいた。

上級魔法 泥人形。一ノ瀬が使った魔法である。等身大のダミーを作るだけなら初級レベルの魔法なのだが何故これが上級の魔法になるのか、それは使用者の意思通りに動くところにある。動く人形なら中級と言ったところだろうが 泥人形 は意思通りに動くこと、操作の難しさや集中力、消費する魔力どれをとっても上級の魔法である。

(行けっ！)

そう念じると二体の泥人形がクロアに向けて走り出す。泥人形二体を相手に威圧されたのかクロアは後ろにステップする。

一列に並んで走ってくる泥人形の先頭にクロアが手の平を向けると、バチイと稲妻が走った。普段使う光の矢より威力が高い分スピードは遅いが相手から向かってきている分には問題ないだろう。

するとスツと先頭の泥人形はクロアから見て左に、後ろの泥人形は右に避けて弧を描きながら迫ってくる。少し焦りながらも冷静に右に避けた泥人形に先読みして同じ攻撃をすると、左腕に命中する。

ドカツと粉々に左腕が土になって吹き飛ばす。しかし次の瞬間には吹き飛んだ肩口から泥人形が出来た時の様にボコボコと蠢くと腕が生えていた。

その様子に驚いたクロアは左から迫ってくる泥人形を見ていなかった。ハツと左を見ると泥人形の右足がクロアの顔面に目掛けて振りかぶっていた。

しまった！　と思うのと同時に左腕を顔の横に出して防ぐ。どれほど強い蹴りが来るかと構えていたクロアだったが、左腕を襲った感覚は予想外のものだった。

『ボスッ』例えるならこんな音だろう。え？　と思い泥人形を見るとクロアの腕に当たり右足が砕けていた。普通の回し蹴りの場合は防がれたらそこで腰は回らなくなるが、泥人形の場合は腕に当たった反動で自身の足が砕けたために回転が止まらずクロアに背を向けた状態になっている。

（何だ、案外脆いのか）

その判断は間違っていた。背を向けていた泥人形が百八十度振り返る勢いを上乗せして強烈なボディブローを放ってきた。

体がくの字に折れ曲がる。肋骨がミシミシと悲鳴をあげるが口からは声が出ない。肺を圧迫されたせいか一瞬だけ呼吸ができなくなる。思わず膝をつき咳き込むが相手は容赦なく追撃してくる。

ボディブローを放った泥人形が躊躇なく踵をあげた。

「……っ！」

咄嗟に右に転がって避ける。ドオンと踵が落ちた地面が抉れるのを見てクロアは戦慄する。しかし相手は戦慄や後悔する暇すら与えてくれないようだ。

右に避けたため正面からもう一体の泥人形が肉薄する。しかしこれ以上相手のペースにのまれる訳にはいかない。魔力の面で若干不安だがそうも言ってもらえない。一ノ瀬は土の魔法を使うのだ。つまりクロアがいくらレイピアで突いても土の硬度が強化されるし、上級魔法で怖そうにも復活する。それ以前にそんな隙が無い。今は守る時なのだ。

（白世界！）

体から力が抜けていく、魔力を消費しすぎたようだ。

（あと少しだけ持つてくれ！）

そう祈りながら 白世界 にある効果を付随する。光を操るクロアなら言ってしまうえば 白世界 の中では支配者なのだ。他の存在を

許しはしない。

白世界　　の中の光に付随する効果は重力だ。　　もちろんクロアは対象外である。

魔力の量の関係で一ノ瀬には届かないが先ずは泥人形を潰す。接近していた為、泥人形は見事に範囲内に居る。

クロアがゆっくりと立ち上がると同時に重力を上乗せすると、泥人形たちが地面に倒れ伏す。更に加重、加重、加重。恨みを晴らすかのように加重を繰り返すと耐えきれずに泥人形が壊れた。文字通り潰れたのだ。

ゆっくりと一ノ瀬に向かって歩く。このクロアが絶対の世界に引き込むために。

一ノ瀬は傷口から染み出る大量の出血、クロアは魔力の消費によって二人の状態はほぼ限界だった。一ノ瀬は歩いてくるクロアの表情を確認できないほどに目が霞み、クロアの足取りも覚束ない。そんな状況でも戦おうとする二人の姿に会場も始めとは違う雰囲気包まれていた。

絶対領域を確保しながら俯き加減でゆっくりと地面を踏みしめて歩いてくるクロア。しかし気付いているのかいないのか、白世界の範囲が徐々に狭くなってきている。

対する一ノ瀬は歩いてくるクロアに恐れる事なく、前進もせず後退もせずに立っている。動く余裕が無いのかもしれないが、それを知るのは一ノ瀬本人だけだ。

クロアの歩みが進みもう少しで一ノ瀬が 白世界 の範囲に入る。トンとクロアが右足を出した途端に一ノ瀬の全身が悲鳴をあげた。刺された横腹から血が更に滲み出る。筋肉や骨がミシミシと鳴るが一ノ瀬は構わずクロアに向かって歩き出した。二人の距離はそれほど遠くは無い。しかし一ノ瀬にはとてつもなく長い距離に見えた。だが朦朧とする意識の中、歩みを止めることは無い。

何分たっただろうか、五分かもしれないし一分程度かもしれない。全ての感覚が麻痺して痛みすら鈍くなった。が、ようやくクロアが一ノ瀬の攻撃範囲に入った。底を尽きているはずの体から右手だけに全ての力を込める。これが最後、ここでクロアを地に伏せなければ負ける。グツと拳を握りクロアの顔面に目掛けて振るう。

「おおおおおおお！」

一ノ瀬を信じて戦ってくれた劫亮と烙耀の姿がよみがえる。負けるわけにはいかないのだ。王者のプライド等ではなく、友との約束として。

しかし現実とは残酷なものだ。全体重を前に乗せて殴ったのに鳴ったのは気の抜けた音だった。一ノ瀬が手を抜いた訳でも、クロアがかわした訳でもない。それが一ノ瀬に残っていた力だったのだ。

意識が途切れる。糸が切れた操り人形のように前方向に　クロアに

もたれ掛かる。クロアだって限界の状態で一ノ瀬の様な背の高い男の子を受け止めるほどの余力がある訳も無く、同時に倒れこむ。当然、二人とも受け身をとれる状態ではない。このまま倒れば確実に頭部を強打することになる。

そんな時、瞬時に二人を受け止めたのは教員用のテントでこの試合を見ていた総司達の担任であるロックだった。

「二人とも気絶している。引き分けだ」

審判たちよりも速く移動したロックは何事も無かったかのようにそう言うと、二人を抱えて消えた。おそらく手当に向かったのだろう。

倒れた二人の事も気にはなかったが、総司の頭には只の教員らしからぬロックの実力が気になった。

クロアと一ノ瀬が接戦を繰り広げている最中。広い学校の敷地内の人通りのない一角に黒いスーツを身に纏った六人の集団がいた。

「よし、全員覚えたか？」

リーダーらしきサングラスをかけた男が冷めた口調で確認する。それに応じるように他の五人が首を縦に振る。

「では、手はず通りに……」

サングラスの男がそう告げると同時に今まで居た事実が無かったかのように全員の姿が消えた。

(とうとうこの時が来てしまった…… 会長と一ノ瀬さんは引き分け、つまり私とお兄様の試合で全てが決まる)

自然と鼓動が高まる。が、気まずさもあつた。心から慕う兄に手をあげるなど、出来ればしたくないのだ。昔は組み手をする度に心が痛んだ。手合わせの前に俯く電に総司は「手加減するなよ」と言ってくれた。おかげで多少は気が楽になったが。

真っ直ぐな瞳で兄は電を見つめる。ますます鼓動が速くなるが気合

を入れねばいけない、昔の兄ではないのだ。今となっては本気で戦っても勝てるかどうか分からない。

(でも、やっぱり嫌だ……)

胸が痛む。思わず俯いてしまう。

「……電」

目の前から聞こえた声にハッと顔をあげる。そこには昔と変わらぬい優しそうな笑顔の兄がいた。

「手加減するなよ」

ニコツと笑う兄に今までとは違う痛みが胸に走り体が火照る。

(ああ、これだから私はお兄様の事を……)

「では、お言葉に甘えて……」

「絶対零度」

雹の綺麗な唇が端的に動いて会場が冷気に包まれる。

「灼熱地獄」

雹と同じように呟くと冷気に負けないほどの熱気が周囲を覆う。魔法の発動に技名の宣言等はないが、工程の一部として脳内で処理していた事を口に出して補助することで威力や速度が上がるのだ。どんな技を出すのか知れてしまうのがデメリットだが……

雹の背後から覆うように総司に迫る冷気が雹と総司の真ん中で止まる。それを視認できるのは地を這う氷だ。シューと音を立てながら昇華する。

「アイススパアー」

雹がそう呟くと気化した水蒸気が一本の長い槍となって総司に飛んできた。火、水、土、風は光や闇と違い再利用が出来る事が利点の一つである。火は酸素があれば強く燃える（火種は魔力で作るしかないが）、水は氷として使い蒸発しても水蒸気を水として使用できるので消費する魔力が抑えられる。

「くそっ！ ファイアウォール」

すると総司の目の前に真っ赤な炎の壁が現れて水の槍を蒸発させる。

「ウォーターニードル」

総司の周囲に複数の水の粒が浮かび一斉に刺となって迫りくる。この水がどの割合で魔力から作ったものか分からない、故に雷の魔力の消費具合が分からない。それに加え雷の魔力はクロアにも勝るとも劣らない程あるのだ。耐久勝負は諦めた方が賢明の様だ。

「灼熱地獄」

最初と同じように総司を中心に熱気が溢れる。しかし注ぎ込む魔力は最初とは違った様で、その空間に水の存在を許さないと云わんばかりに雷の攻撃を打ち消し、水を出した瞬間に蒸発すると言つ雷にとっては手も足も出ないほどの威力だった。

しかし試合がそのまま進むほど電は甘い相手ではなかった。

総司が自分を中心に 灼熱地獄 を展開している約十分間ずっと攻撃を仕掛けてきたのだ。つまり、傍から見れば総司が押されているような状況に見えるのだ。事実、電は攻撃だけしている。逆に総司は攻撃に移れないでいるのだ。

灼熱地獄 は自分の魔力を熱に変えるだけなので炎が出ている訳ではない。つまり魔力の再利用をしながら攻撃している電とは違って純粋な魔力だけで熱と範囲を調整しているので、魔力の消費も速くなるのだ。

だが総司の顔に焦りが見えなければ、魔法の威力や範囲に関しても衰えを見せない。それは総司の絶大な魔力があつてこそ成し得る事であり、普通であれば 灼熱地獄 を五分でも続けたならば魔力が底をつきて気絶ものなのだ。

しかし電だつて負けていない。生まれつき多い魔力を油断せずに節約しながら使っているのだから攻撃の手は緩まない。が、

「絶対零度」

そう言ったのは電ではなく総司だった。会場を包んでいた熱気が急激に冷気と化す。それと同時に電が攻撃に使っていた ウォーター

ニードル が凍りつき地面に落下し、地面も雹に向かって凍りついていく。

「ぜ、絶対零度」

雹も少し焦りながら同じ技を繰り返す。総司の様な特例を除いては一人に一属性しか使えない為、自分と同じ属性の使い手が現れた場合は相手より多い魔力で打ち消すか相殺するしかないのだ。尚且つ総司は今まで火属性の技を使って守っていただけだったので、急な攻撃に驚きと焦りを隠せなかった。焦りながらも 絶対零度 が使えるあたりで雹の実力が伺えるが。

しかし総司の次の一言は雹に更なる衝撃を加えることになる。

4 - 4 兄対妹3

「インフェルノ」

総司のその一言で氷に包まれた地面から突然六本の火柱があがった。総司の手が雹に向けて振り下ろされた次の瞬間、轟々と音を立てている六本の火柱が一つにまとまって雹に迫っていく。

対する雹は迫ってくる火柱に手の平を向ける。すると総司の魔法で溶かされた水が見る見るうちに集まり氷の壁になった。

火柱と氷の壁がぶつかり合い拮抗する。

「インフェルノ を重複発動」

総司は氷の壁との拮抗を片手間にもう一つ同じ魔法を発動させた。もちろん同じ魔法でも違う魔法でも重複で発動させるのは集中力も魔力も必要とするが。

雹を中心にして正方形に四つの火柱が上がった。その瞬間に一つ目の拮抗していた火柱がパツと消えた。

これは総司が消したものだがこのまま続けていても魔力も集中力も散漫して押し負けてしまうので切り捨てたのだ。

だが変化は他の火柱にもあった。火柱が真っ直ぐに伸び終わった時に動きが止まったのだ。雹はさっきの様に一本にまとまって迫ってくるものだと思っていた。

「インフェルノを氷龍に移行」

そう言った瞬間に四つの火柱は長さや太さがそのままの氷の龍に変化していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9241n/>

~ idiosyncrasy ~

2011年9月11日05時40分発行